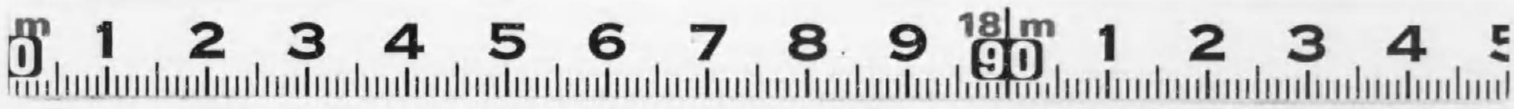

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 18 90 1 2 3 4 5

517
39

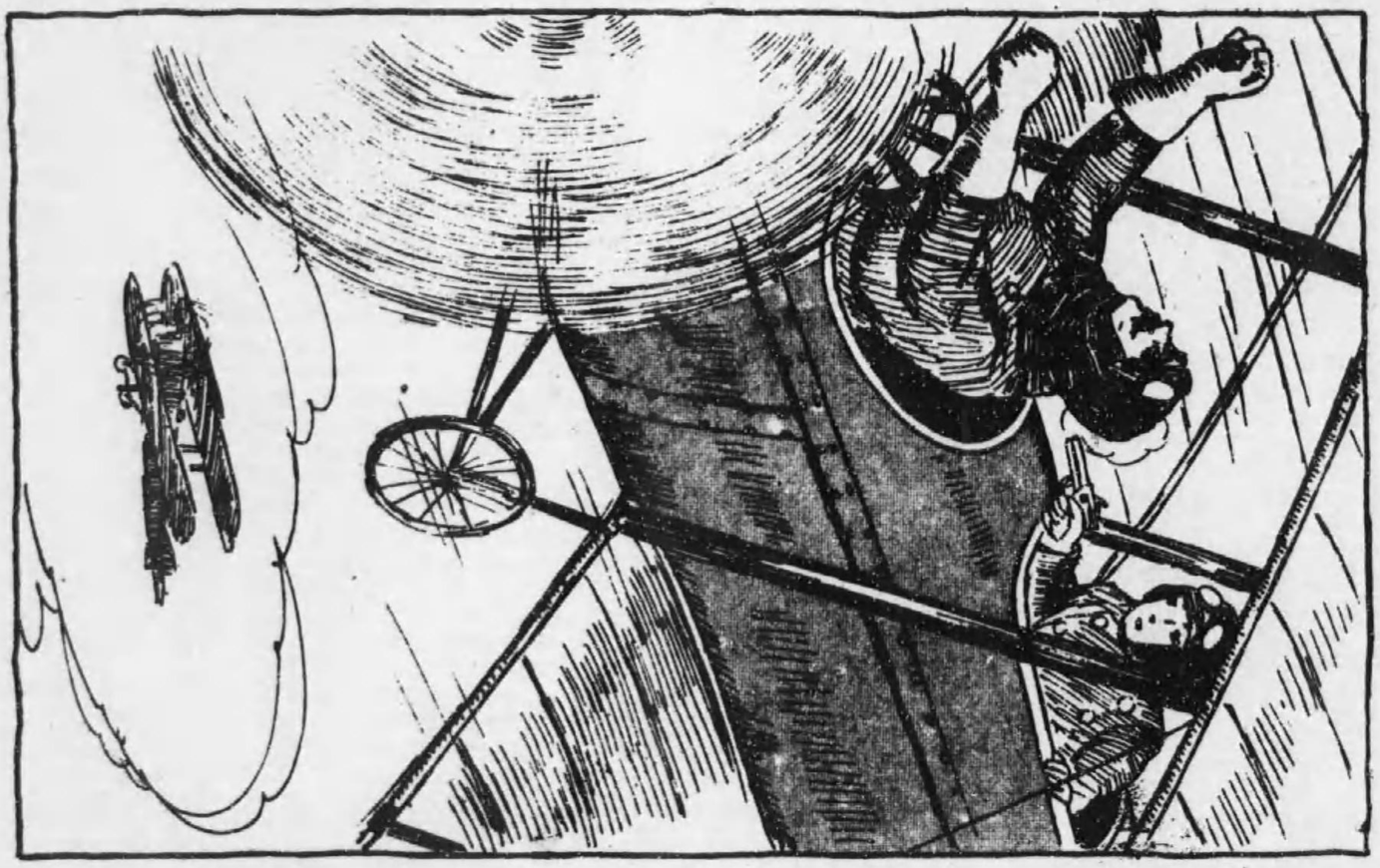
15.7.24

577-39

一彈

水谷竹紫著

大正
11.11.11
内交



序

文壇劇壇の先進として、幹部級の操觚者として、豊かな學殖、圓滿な常識の人として知られたる、當文部省囑托社會敎育調査委員水谷竹紫氏が、最近數年の餘技になる少年小説を集め、逐次刊行さるゝといふ。拜見するところ、何れも純眞な輕快な筆致で、よく少年の心を捉へ、その淨らかな快活な奔放な天眞爛熳を描き出されたやうに思ふ。

氏は曰く、此の集の何れの部分に於ても、少年の品性なり趣味性なりを、一毫と雖も害ふことのないのを、何よりも密に矜として居ると。

さうであらう、いや如何にもさうである。此の意味に於て、

余も亦氏の態度と作の主旨を賛し、本集の刊行を心から悦ぶものゝ一人である。

大正十一年十月

文部省社會教育課長
乘杉嘉壽

自序

少年は美しい、純眞で清淨で、無邪氣で、元氣で、人の心にいつも穢のない明るさを感ぜしむる。

少年期の回想は、我々にとつては砂漠にオシアスを想ふ事であり、少年物語を書いて居る裡は、何となく心に若返りの血が循つて居るやうに思はれる。

此の本は、私がこの五六年、諸方の少年雜誌の依頼により、折にふれ、少年の讀物として少年諸君の爲に書いたものの内から、手當り次第に集めたものだ。

だから、集として特別の計劃や考案があつたのではない。

しかし、私は此の集の中で、一文と雖も、日本の少年の情操なり

趣味なり品性なりを損ふことのないのを聊か矜として居る。

近時の少年小説や童話の間には、唯に主人公を少年にかりて、その實大人の感情や大人の思想を描いて、大人の讀物にしかならないものが多い。特に多感な少年期を憂欝に損ふ、羸弱な劣小な哀傷本位のものも少からず見受けらるゝ。

少年自身の藝術としても嘘なら、少年の讀物としても決して適當とは云はれない。

此の本に書いたものは、そんな不自然なひねくれた變態的のものではない。

少年期の矜として眞正の人間が有つて居る、暢々した、わだかまりのない純眞さと快活さを基調とした、明るい力强い趣の記錄である。

成程、世の中には哀傷に充ちた慘慘な暗い少年期を過す人もある。從つてまた、幾多のセンチメンタリズムを提供する材料もどつさりある。しかしそれは變態だ。世の中が惡い爲に、さうなるのであつて、眞の人間としての少年期の特徴ではない。世の中が健全に復して、それが自然の狀態にあるときには、人間の少年期は、凡ての動物の少年期と等しく、神に近いものであらねばならぬ。

いやいや、血腥い戰場でも、春が來れば、草が芽ぐんで花が咲く、いかに險惡な暗い世の中でも、少年の頰には明るい血が漲つて心の底には云ひ知らぬ快活さが潛んで居る。大人は之によつて淨化され、世の中は此の底明の爲に躍動する。

私の描かんとした處は之れである。讀む人にも書く人にも

眞の意味の少年の形相を想ひ起さしめんとしたものに過ぎぬ。

書き方はあまい、むしろ興味本位に、あくまで少年本位になつて居る。書いた時代を異にして居るので、行文にも精粗さまざまある、しかし書いた時の心持は、常に一貫して正に之れだ。之れだけ含んで讀んで下さると、著者としては頗る本懷である。

大正十一年十月

牛込の銀杏樹下にて

水谷竹紫　誌す

目次

この一彈……一
飛行西遊記……四五
無點火燈臺……八一
犬祭……一二五

この一弾

一

獨逸軍のために捕へられた日本の少年が、敵の飛行機を奪つて、巧にその陣營を脱け出した、と云ふ話は、歐洲戰爭の初め頃、英佛の大人達の膽玉をぬいた痛快な出來事でありました。そして此のすばらしい冒險譚が新聞や雜誌に書き立てられますと、英吉利にも佛蘭西にも、一時に少年飛行熱が旺んになつてそれはそれは大變な評判、日本の飛行少年と名前は、彼地の少年達から、全然御伽噺の王様のやうに崇拜されました。

ところが、この少年……名前は英夫さんと云ふんです……が、愈日本に歸つて見えましたので、待構へて居た日本の記者達は一目散に英夫さんの御宅へ、驅けつけて、痛快な面白い御話を聞かうとしたのです。

英夫さんの御邸は東京の郊外、とある小高い丘の上にあつて、記者の通された應接間からは、ぎらぎらする海がよく見えて居ました。父御が軍人ですから、室の内には大砲の彈だの、地圖だのが澤山にかゝつて居ます。古風な銃だの、昔の外國の劍だのいふものも飾つてありました。

記者は待つてる間に、此の珍しい劍や銃に觸つて見ながら、室の内を見廻したり、外の景色を眺めたりして居ますと、俄に廊下にバタバタといふ音が聞へて、ブルテリアの可愛い仔犬を先頭に、この有名な英夫さんが驅け込むやうに這入つて見えました。

『僕が野田英夫です。』

と、云つたまゝ、きちんと軍隊式の直立不動の姿勢で、挨拶をされるのです。年は十四とか聞いて居ましたが、體格はなかなか立派で、一寸見ると、十五にも十六にも見えませう。梟のやうな圓い眼をぐるぐるさせて、きりゝとした半ズボンの洋服の、馬鹿に快活な、怜悧さうな少年です。

記者が、いろんな事を尋ねると、羞恥もせずきびきびした口調で、どんどんおしやべりをやるんです、それも初は口の利き方が少しは改つた調子でしたが、半ば頃からは、まるで親しいお友達のやうに

なつて、

『ねえ、君、それからね……』

と云つた工合、そのたんびに、犬の頭を輕くぶんなぐるのです。擲られる犬こそ災難ですが、この犬がまた、平氣の面で、擲られるたんびに、舌を出して若主人の指を嘗めました。

二

英夫さんの話によると、父御の××將軍が大使館附の武官として英國に滯在中、ひどい病氣にかゝられたので、當時まだ五つの英夫さんは、お母さんに伴れて、英國に行つたんです。父將軍の御病氣は程なく治られましたが、その後もその儘大使館に勤めて居られたので、英夫さんも、やはり倫敦にとゞまり、そこの學校で、英國の子供達と一緒に勉强したり遊んだりして居たのでした。

處がこんどお父さんが歸朝する事となつて、倫敦から船に乘つて出發しましたところ、その乘り込んだ船が、航海中獨逸の潛航艇に擊沈められまして、親子三人は大騷動大叫喚の間に、離れ離れになりました。

云ふまでもなく汽船が沈沒するときには、婦人を先づ救助ける規則ですから、英夫さんの御母さんは、まづ第一のボートにのせられました。英夫さんも續いて乘らうとすると、船の士官が、

『まだ御婦人があるから、男は可けない、可けない。』

と云ふのです。お母さんは氣狂のやうになつて、英夫さんを呼びま

すし、英夫さんも泣きしやくりながら、無理に乘らうとすしまと、お父さんが後から抱き止めて、

『英夫はもう十三にもなる男の子ぢやないか、見苦しい眞似をしちや可かん。』

と叱り付け、お母さんの方に向いて、

『英夫は俺がしつかり預かるから安心しろ。』

と叫ばれたさうです。

『僕はその時位、お父さんの嚴めしい顏を見た事がない。』

と英夫さんは可愛らしく眉をひそめて、大人のやうな口を利きました。

それから父子は次の短艇で逃げましたが、お母さんの短艇とは次第次第に離れて了つて、泡立つた浪は次第に闇に被はれる。一夜を漂流した翌朝になつて見ると、お母さんの短艇はもう影も形も見えなかつたんです。強い強い英夫さんも、此の時ばかりは聲を立てゝ泣いたさうです。

だけど英夫さんの短艇は間もなく、通りかゝつた汽船に救はれて、遂々白耳義の安土府の港に到着しました。

この土地には將軍の親友の方が、要塞司令官をして居るので。それをたよりに親子は暫らく世話になつて居りました。その內戰爭はだんだん烈しくなつて、安土府はもう出るにも入るにも、どうする事も出來ないやうに、獨逸軍から圍まれて了ひました。

英夫さんは始めの間は、恐ろしい目にあつた驚愕やら、知らぬ人

の間に來た遠慮やらで、溫順しくして居ました、二三日も經つと、持前の腕白が起つて、砲臺だの、大砲だの珍らしさに、諸方へ飛び廻り、若い將校達も大分お友達になり、却つて面白い處に來たやうにはしやいで居たんです。

しかしそれは晝間だけの事、夜になると、あの危急の間際に波の間に別れたお母さんの事が思ひ出されて、寢床の中でしくしくやつては、嚴しいお父さんからよく叱られました。

『僕は、毎晩の樣にお母さんの夢を見たんだぜ。』

と、英夫さんは、當時を思ひ出したやうに、うつとりとして、丁度膝の上にあつた、犬の頭を抱きしめました。

三

英夫さんは、まだ話しつづけるんです。

『……するとね、君、ある晩、僕がもう寢て居る時お父さんのところへ、ジョンの叔父さん……ここの司令官さ、ほんとうはミカエル、ジョンストン將軍と云ふんだよ……がやつて來て、何んだか手紙見たいなものを渡して、こそこそと話してゐるんだよ。

話しの内に、お父さんは馬鹿に驚いたやうに喜んでゐるし、僕も何んだか氣になるから、毛布の間から覗いてゐると、ジョンの叔父さんが、云ふんぢやないか。

『さうすると、英夫さん丈けはとにかくお送りする事にしよう。君は御希望通り止つて貰ひたい。』

つてさうすると、お父さんは、

『よろしい、然し脱出の方法があるかね、いくら子供だつて、この重圍を潛り拔ける事は……。』

『あるよ。』

『どう云ふ考案で……。』

『無論地上は鼠一疋だつて駄目だが、空中は自由だからな……天は高い、天は無制限だハハハ。』

と、お父さんは思はず膝を叩いて、筒拔けるやうに叫んだね。

『飛行機か！。』

飛行機と聞いて僕は思はずむつくと動いたよ。なに、飛行機が好きかつて、エエもう大好きさ。これでも倫敦に居た時、隨分乘せて貰つたぜ。ハンドルの動かし方だつて少しは知つてるんだぜ。

その内お父さんとジョンさんは大分種々な話をして居たやうだが、

『ちや愈〻さうと極めた。』

と云ひながら、僕を搖り起すんです。僕は先刻から覺めてるけれども體裁が惡いからわざと寢呆けた樣に、

『お母さん！。』

と云つてやつた。

お父さんは、何んだか、ぎよつとしたやうだつたが、

『おい英夫、起きろ。お母さんから手紙が來た。』

と云ふんです。今度は僕の方がぎよつとして突如はね起きたんだ。

『なに、お母さんが何處へ。』

と無暗に聞くと、

『何んだ、ジョンストン將軍へ御挨拶をしろ。』

と一喝して、それからお母さんが御無事で倫敦にまた歸られた事、僕に逢ひたがつて居なさる事、ここは明日にも總攻撃があるかも知れないから、お母さんの處へ行くがよいとの事、それで司令官の御心配で、飛行機に乘つて、明日の夜明に此處から出發する事などを話してくれたんだね。

僕は唯夢中で聞いて居た。

お母さんが御無事と聞いただけで、もうそこへ行きたいのに飛行機に乘つて行くと云ふんだから、嬉しいの何んのつてありやしない、お父さんが何時になく、嚴しい顏をして、噛んで含めやうに、繰返し繰返し云つて下さる間も、唯

『うむ』『うむ。』

し合點くばかり、心はもう倫敦の空を飛行機で、飛廻つてるやうであつた。

だがね君、はつと氣が注くと僕ばかりが行つて、お父さんは殘るんだと云ふぢやないか。そりやいやだ、いやだ。

『だつて、僕單獨ぢやつまらないや、ここは明日にも戰爭があるつてぢやありませんか、危いからお父さんも一緒に行ませう、ね。』

と云ふと、

『馬鹿ッ。』

とお父さんは呶鳴つたもんだ。

『俺は軍人だッ、戰爭となれば御用がある。御前は單獨で行くのが恐いのか……、弱虫!!』

お父さんの眼はいやに光つけ、僕之れでも強い積りだ。弱虫と云はれちや癪だから、不平だけれど、仕方がないから、我慢して行く事に決心した。

お父さんはしみじみ頭をなでて云つたんだよ。

『お父さんは、後から直ぐ歸るから、お前、先へ行つてようくお母さんに話すんだよ。それからお母さんの云ふ事を聞いて、しつかり勉强するんだぞ。』

つて、

遠い南の方には大砲の音が遠雷のやうに響いて居る、僕は何んだか悲しくなつちやつた。

四

翌朝、まだ旭の上らない夜明に、堡壘内の練兵場に行つて、かねて仲よくしたエフ中尉に引上げられて飛行機に乘つちやつた。夏だつたけれど、風は何んだか冷たかつたぜ、お父さんもジョン司令官も、皆側に來ていろんな世話をやいて下すつた。そしてお母さんへの土產だの手紙だのを受取つて、司令官が右手を上げたのを合圖に機は滑走を初める。僕は思ひ切つた大聲をあげて、

『さようなら。』

と呶鳴つた。

暫らく機は空中に舞ひ上り、練兵場の上を一周した時、ふと下を見ると、お父さんが兩手をあげて、盛んに白いハンカチを振つてゐるぢやいないか、僕もハンカチを振つて應じようとしたが、忘れたと見えて持つて來てない。振るものがないから、僕何んだか泣きさうになつて、身悶へしながら探したけれども、何んにもない。仕方がないから襟飾を引きちぎつて打振りながら最後には被つて居た帽子と一緒にそれを投落した。

拾ひに走つたは確かにお父さんに相違なかつた。

僕があまり動くので、機の安定が保たれないつて、中尉は再々叱り付け、とうとう飛行機を堡壘の見えない處へ走らせて了つた。僕はぼんやりしながら默つてゐると、

『坊ちやん下を見ろ。』

と云ふんです。氣がついて見ると、さあ……

君戰爭が始まつてるんだぜ。蟻みたいな人があつちにもこつちにも集團になつてうよ〳〵してるのが見える。繩を曳いたやうな塹壕は二重にも三重にも線を描いて、虫のやうに見える兵士が何かして居る、やあ騎兵が走り出した。おや自動車が追かけて行く、砲列の所は何のことはない『世』と云ふ字を並べたやうに見える。どれが敵だか味方だか僕にはさつぱり分らん、中尉に聞くけれども、プロペラーの爆音が喧しいのでなかなか聞きとれない。

仕方がないから、塊つて眞黑になつて居るのが獨逸で、散兵になつてるのが白耳義だと、僕獨斷にきめて熱心に見て居たんだ。する

と中尉も戰爭が見たいと思つたんだらう、機の方向を更へて、だんだん低く下り初め、南へ南へと進んだ。

進めば進む程、人は近く見える蟻のやうな人が豆になつて、馬が犬位になつた。眞白な川はうねうねのたくりながら光つてるし。森の合間合間に見ゆる天幕は何の事はない青い池に鵝鳥が泳いでるやうに見える。綺麗と云つたらなかつたぜ。

飛行機は益〻低く下りて行つた。地上何米突と云ふのか知らないけれども、もう何もかも手に取るやうに見える。密集隊の上に砲彈が破裂して、集團は一時にぱつと散亂する。殊に地上には人や馬がころころ倒れてる有樣がありありと見える。爆彈があつたら僕だつて屹度百や二百の敵は倒して見せらあと思つたよ、實に愉快でたまらないから盛んに萬歳を叫びながら、その近邊を二周も三周もやつて居た。

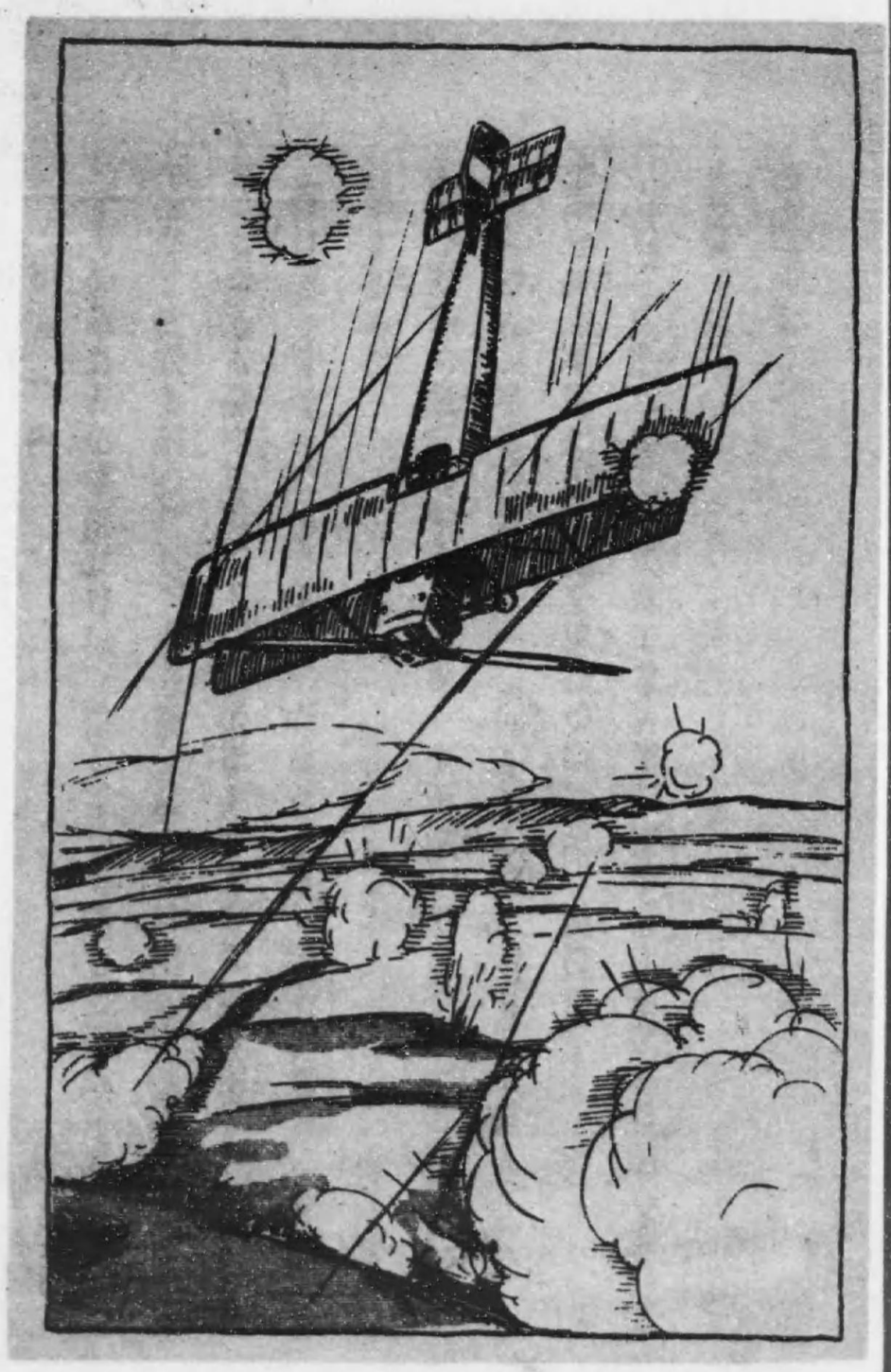
さうすると中尉がいきなり地團太を踏んで、何か呶鳴りながら指をさすんぢやないか、見るとまあ、味方の戰線の端の方、兵隊の極少ない方面へ、川岸づたひに隱れ隱れ、敵の可なりな密集團が押し寄せて行く處なんだよ。味方は少しも氣が付かぬらしい。

さあ大變だ。知らせてやりたいけれども、空の上ぢや仕樣がない。糞忌々しいので、丁度機がその奇襲の眞上に來た時、僕はいきなり突つ立つて、ぢやあぢやあと小便を垂れかけてやつたよ。ハ、、、、

五

そこまでは、大の得意だつたけれど、いざもう、戰見物はやめて戰線外へ出ようとする時、敵陣でも僕達の飛行機に氣が付いたと見え、一集團の敵は無暗に一齊射擊を浴びせる。機關銃までが、銃口を空に向けたんだ。彈はピユーピユー云つて機側を通り、機の翼には二つ、そら三つと流れ丸の穴が明くやうになる。もう氣が氣でなかつたぜ。

だけど中尉は偉いやニコニコしながら、泰然自若てんだらう、平氣の平左でぐんぐん上舵を引いて雲の中に逃げ込まうとする……そのとたんに……君、どうしたと思ふ、ピシンと音がして發動機がいきなり止つて了つたんぢやないか。僕は思はずハツとした。中尉も蒼白になつて



『失敗つた！』
と呶鳴つた。
だけど中尉は少しも周章てないで、空中滑走を試みながらぢつと地面を眺めて居たが、何を思ひついたか、慌ただしく
『坊ちやん、手傳つて下さい、何もかも書いたものは破るんだ。』
と云ひながら氣狂のやうにポケットを探つて、手帳だの地圖だのを引裂き初めた。
僕はどうするんだらうと思つたけれども、中尉が無暗にあせるから、こつちも夢中になつて、僕のポケットのものも引裂いた。大切なスケツチ帳も破つたし、大分書きためた日記も皆嚙み崩いた。それでもお母さんの手紙だけは、惜しくつて殘して置いたよ。

飛行機は糸を切られた凧の樣にひらりひらりと動搖しながら、空中滑走でだんだん下りて行く、下からは益〻彈が飛んで來た。

『もう仕方がない、敵陣へ着陸だ。大切な書類は始末したから、先づ安心だ、坊ちやんしつかりつかまつてらつしやい。』

と中尉が叫んだと見る間に、機は逆落になつてすうと地面に近付いた。空中から逆落の着陸法だね。彈が來るからかうしなければ、早く下りられないからさ。

だけれど、敵は喝采の代りに急射擊を以てしたが、幸に二人とも彈には當らないで無事に着陸する事が出來たんだよ。無論附近のものはわつとばかりに集まつて來る。

敵だ、敵だ、敵陣の中だ。僕は嚇となつて用意の短銃を振り上げたら中尉は矢庭に僕の手を制へて

『危い！駄目だ！』

と叫んだ。

だつて、いくら子供だつて、僕は日本男子だもの、みすみす捕虜になつてたまるものかい。

『いやだ、いやだ。』

と云ひながら、最先に來た兵隊の胸に一發ズドンと御見舞ひして、二發目を引かうとする時、大きな男が無理やりに僕の短銃を奪つて了つたぢやないか。

口惜しい、口惜しい。何糞と散々にあばれてやつたけれども、何しろ、向ふは大勢だらう、こちらは僕一人だもの、たうたう捕つち

やつた。

見ると、もう中尉は何處へつれられて行つたか分らない。折角乘つて來た飛行機には誰が火を付けたか、どんどん燃えて居る……

僕は地面にしがみついて、泣けるだけ泣いてやつた。

六

英夫さんの話は、子供と思へないほどに筋が立つて、達辯で、手を振つたり、足を踏み鳴らしたり。犬も何もおつぽり出して、唯さへ大きい眼をくるくるさせながら熱心に話し續けらるゝのです。記者も我を忘れて乘り出しました。

『ねえ君、仕方がないやねえ、こつちは子供一人なんだらう。仕樣がないや。つまり僕たうたう捕虜になつて了つた譯さ、いや捕虜ぢやない……天から降つて來てやつたんだい。

それからね、目隱をされて、自動車に載せられて、何だか分らないが、だいぶ遠方へ連れて行かれちやつた。そして鬚だらけのこわい老人の前に立たされて、いろんな事を聞かれちやつた。

一等初めには、英語で、獨逸語が話せるかと聞くから知らないと云ふと英語はどうだと云ふ。英語ならば巧いもんだとやつつけると何處から來たかて云ふぢやないか。僕困つたから

『天から來ました。』

と云つてやると、鬚爺、妙な顏をして居たつけ。それで愈〻僕が日本人だと云ふ事が分ると、後の方に居た、ハイカラのカイゼル鬚

の若い士官が

『坊ちやん、日本語で話しませう。』

と、可なり巧い日本語でやり出した。僕は一目で此の人が好きになつちやつた。

『何も恐い事はない。獨逸は日本人を敵としては居ない。何もかも知つてるだけを御話なさい、どうして白耳義の飛行機に乘つて居たんです。』

と、親切に云つてくれるんだ。僕嬉しくなつて、何もかもすつかり饒舌つちやつた。だけど、お父さんの名と、チヨン叔父さんの名は、どうしても云はなかつたよ。偉いだらう。

『僕、お母さんに會いたいんです、母さんに會いたいから、白耳義の人にたのんで、連て行つて貰つたんです。』

するとね、この若いカイゼル先生

『オーお母さんに。』

と云つて、兩手を胸に組んで、天を仰ぎながら、その手をうんと差し伸しながら僕を抱いちやつた。そしてそこに居る將校達へ何か云ふと、中央の鬚爺始め皆もオーと唸つたんだよ。僕少し可笑しかつた。

それからと云ふものは、非常に親切にしてくれて、その士官が、自分の室に來いつて連れて行つてくれた。

後で聞くと、此の士官はルンプと云ふ大尉で、鬚爺さんの副官ださうだ。四年前から日本の公使館附武官で、東京に住んで居て、つ

い此の頃戰の爲に歸つて來たんださうな、道理で日本語が巧いと思つた。

此の人がまた非常に可愛がつてくれて、一寸でも居ないと、從卒を探しにやつてくれる、御馳走でもあると、きつと二人で食べるんだ。そして、僕の知らない東京の新しい事なんかだいぶ話してくれたよ、僕のすきだつた上野の動物園の象が死んだと云ふことも、その代りに河馬が來たと云ふ事も、日本にだつて飛行機があるつて云ふ事も、みんな此のルンプ大尉から聞いたんだ。

戰爭中だから、居所はしよつちう變るけれど大尉とは離れなかつた。終ひには戰線〳〵の見廻に行くときでも、僕を副馬にのせて連れて行つてくれたほどであつた。

『英夫さん、獨逸と日本とは敵同志ではありません。日本は獨逸の親友です。英國は敵だから、英國に君を送つてあげる譯には行かないが、お母さんが日本に着いたと云ふ報せさへあれば、どうにかして日本に送つて上げる、それまで待つていらつしやい、君は強い子だから、戰爭は面白いだらう。戰爭ならいくらでも見せてあげるが、彈の來る所へはいつてはなりませんぞ。』

と云つてくれたこともある。

その内に、だんだん、外の士官だちとも兵卒ともお友達がどつさり出來て、陣地内を自由に飛廻つても誰も叱らなかつたばかりか、どこの陣地でも日本少年日本少年つて歡迎してくれたものだ。僕もかうなると搆はないから、どんな所へも行く、高等司令部の鬚爺達

の集つてる處にでも平氣で行つて、可なり惡戯をして來た事もあつたよ。

え、飛行機かい。乘つたとも乘つたとも、隨分乘せて貰つたよ。偵察將校の出るたんびに乘せて貰つたから、隨分いろんな事も見たよ。自分で少し位は操縱する事も出來るやうになつたさ。

君、戰爭なんて、空の上から見ると、何でもないものだねえ、ただあつちこつちに人間がうぢようぢよしているばかりだ。恐くも何ともありやしない。砲兵は蔭の方から盛んに打つてるけれども、歩兵なんか、何もしてないぜ、大抵は壕の中で寢て居らあ。

だけど、空の上から見る景色は綺麗だぜ、僕なんか何と云つて可いか、口ぢや云へないけれど……そうら、そこの窓掛ね、そのきれ、うむ印度更紗て云ふの……その印度更紗見たいなものだね、山だの川だの森だの町だのつて、種々なものゝ種々な形や色が、いろんな模樣となつて並んでるんだもの。

こんな工合に、僕は却つて面白く此の陣營の間を跳ね廻つて居たんだ。

エ、お父さんやお母さんの事を思ひ出さなかつたかつて、それあ極つてらあ、一日だつて忘れた事なんかありやしない。だつて、僕は捕虜だもの、いくら歸りたいからつて、歸してくれないや、仕方がないぢやないか、だから、父さんや母さんが戀しくつてたまらないときには、わざと茶目つて亂暴してやるんだ。椅子を叩き壞したり、花をむしつたり、隊長の飼つて居た猫を二疋までピストルで打

つてやつた。傳騎が來たとき、その馬の尻尾に火をつけてやつたときは猛烈に叱られたぜ。居眠してる歩哨の鼻に紙捻をさしこんでやつたときは、も少しの處で射ち殺される處だつた。

しかし、惡戯をして叱られて、思切つた大聲で泣いてる間は、不思議にお父さんやお母さんの事が隱れて了ふ。だから、僕はいつでも母さんなどの戀しい時には、わざと思切つた惡戯をして、猛烈に叱られてやるんだ。

しかし、大尉は、とにかくほんとに可愛がつてくれたよ。けれど大尉が可愛がつてくれゝばくれるほど、父さん母さんが戀しくなつて來る、父さん母さんが戀しくなればなるほど、またいたづらが猛烈になつて來たんだね。

七

さうして居る内にある日の夕方、司令部から歸つて來た大尉の顏が、いつにない難しい樣子で、妙な調子だつた。僕、何だか心細くなつて、種々とゴマをすつてやつても、大尉はいつものやうに優しくしてくれない。そしてぢつと僕の顏を見つめて嘆息かなんかついてるんぢやないか。

『どうしたの大尉、どうかしたのルンプさん。』

と甘へるやうに聞くと、君、た、大變だ……

『英夫さん、日本は獨乙に戰をしかけたんですよ、もうあんたの國と僕の國とは、交戰國になつて了つた。英夫さん、あんたはもう

敵國の人だ、だから、氣の毒だが、今までのやうな待遇も、これからは出來ないかも知れない。何もあんたが軍人と云ふではなし非戰鬪員でお負に子供なんだから、別にどうと云ふ事もないけれど、戰のすむまでは日本へ歸す事は出來ない事になつた。』

僕は之れを聞くと、ぞつとして、いきなり机にへたばりついたまま、無暗無上に泣きぢやくつた。

その晩の僕は、たゞもう無暗に泣いてばかり居たんだ。恐い事なんかありやしないけれど、母さんや父さんにもう會へないやうな氣がするんだもの、心細さが一杯になつてたんだね。

あんまり僕が泣くので、大尉は氣の毒になつたのだらう『英夫さん、日本が戰をしかけたつて、何もあんたの知つた事ぢやない。恐い事も何もないあゝもう泣かんがよい。明日はK中尉が敵陣地の奥深く飛行偵察をやる筈ぢから、あんたの好きな飛行機に同乘を賴んであげやう、ね、もう泣かないで寢るんだ〳〵。』

かう云ふと、君は、僕がよつぽど泣虫のやに思ふだらう。さう思はれると、少し癪だから辯解して置くがね、その夜に泣いたのは少し計略の氣味だつたんだ。別に何を求めると云ふ目的もなかつたんだが、こゝ一番大に泣いてやると、大尉君、少しは同情してくれるだらうと思つたからだ。果して之れが當つて明日の偵察飛行に乘せて貰うと云ふ獲物が出來た。まんざら無駄でもなかつたねえ……え、狡いつて、はゝあ狡いかなあ……。

しかし、その夜は考へたよ。日本が愈〻獨乙と敵となつたら、僕

だつて日本人だ、おめおめと敵の陣中に巫山戯廻つて、敵の將校の懐にあまへても居られない。歸してくれないなら、愈〻脱出だ、逃げ出すんだ、しかしその方法はと云ふと……さうだアントワープを出たと同し樣に……飛行機、さうだ飛行機だと氣がついたときには、思はずぶるぶると身顫ひしたね。

先刻約束した明日の同乘は、何の意味もない、いつもの好奇心で戰場見物と云ふに過ぎなかつたが、かう考へて來ると、明日の同乘には意味が出てくる、都合によると、その飛行機で巧く戰線を逃出してやりたい……さうだ。と決心して了つた。

さうすると寢るどころか、馬鹿に頭の中が忙しい、あれをかうして、かうして……巧く行けばいゝがなあ、なんかと考へて居ると、

眼は愈〻冴へて來る。不圖見ると大尉は自分の服を僕の身體の上にかけてくれて居る。何の氣なしにポッケットを見ると、一册の手帖が首を出して居た、かねて大尉の大切にして居る手帖なんだ。僕、獨逸語は讀めないけれど、軍事上のいろんな事が書いてあるに相違ない。之れをもつて行けば、何かになるに相違ない。僕は軍事探偵でも何でもないけれど、折角敵陣の中に居たんだもの何かの土産はなくつてはならぬ筈、これがよいこれがよいと、心にきめて、そつと僕の下衣のポッケットに入れて了つた。しかし後で考へるとこれは惡い事をした樣に思つて今でも後悔してるよ。なぜつて、いくら敵だつて今迄親切にしてくれた人の恩を仇で返す事にもなるし、まして夜中に他人のポッケットから物を引出すなんて泥棒ぢやないか。

ね、僕いくら國家の爲だなんて泥棒はいやだよ。その時だつて……おゝその時だつて、何にも知らずに寢て居る大尉の顏を見ると、僕胸の内で御免なさい御免なさいと云ひながら、何だか耻しくつて、自分ながら自分でないやうな氣がしたもの……。

八

翌日は朝から砲戰が盛んである。僕等の夜營地の近所にも、時たまぐれ彈が飛んで來る、裏庭に放してあつた豚が一頭そのためにやられて了つた。かねて司令官の圖體に似てるんで、僕が隊長と名をつけてやつた豚だつたが可愛想な事をしたものだ。

大尉は飛行將校に僕の同乘を賴んでくれる、××中尉は、お馴染の仲だから喜んで乘せてくれた。

『此の少年は、もう可なり操縱が出來るんです、だから僕が射たれたら、坊ちやんが操縱してくれるでせう。ねえ坊ちやん、やつてくれますね、ははゝゝゝ。』

なんてお世辭を云つたものだ。

機は軈て飛行場から舞上つた。見ると、今日はいつもと違つて戰が猛烈を極め、あつちにもこつちにも死傷者がごろ〳〵して居る、砂塵や砲煙で、少し離れた處は見えない、いつもとは全然異つた光景なんだ。僕は身體が引緊るやうに思はれた。機はだんだん進んで佛軍の戰線深く進んだらしい。見覺のある三色旗が、あちらこちらに飜つて、衣服の縞目のやうな道路上には大集團が幾筋も動いて居

る。

今迄にない痛快な光景だ、歩兵が突擊する、タンクが馳る、着彈がしきりなしに破裂する、いやもう面白の何のつて、僕は昨夜來考へて居た計劃も何も、もうすつかり忘れてしまつたほどだ。

不圖、中尉が切りに大聲をあげるので見ると、遙の森の上に蜻蛉位な飛行機が見える。見て居る內に　だんだん大きくなつて、こちらに近いて來る。確に佛國の飛行機だ。中尉はしつかとハンドルを握つて機を佛機の方向にむけた。兩機は見る間に近いて、すれ違ひざまに、佛國側から一發射擊した。彈は僕の鼻先をピューと過つて、翼の端の方に小さい穴をあけた。中尉は矢庭に大形のピストルを出して僕に渡した。敵を打てと云ふのだらう。僕は夢中に二發ばかり引金を引いた。

兩機は追かけたり追かけられたり、近いたと思ふと離れ、離れたと思ふとまたすれ違ふ。翼と翼とが殆んど擦れるばかりになつた事もあつた。僕はそのたんびにハツハツとしながら、面白半分ピストルを射つて居たが、十二連發の十一發を打ち盡して、あと一發となつたとき……

僕の心に吐嗟な閃きが起つた、この一彈、さうだ、この一彈で昨夜來考へて居た大事を遂げねばならぬ……かう云ふ閃きがほんの一瞬時、頭のどこかに起つたと思ふ間もなく、僕の手は既に引金を引いて了つたときであつた。

射つたのは佛機ではなかつた。中尉は何だか叫んだやうだつたが、

いきなりハンドルから手を離して、額の傷口から　血がにじみ出る、やがて、首はぐたりと前に倒れて、體は横倒に傾いた。

同時に機も亦無暗に動搖したと思ふ間もなく、横倒に顚倒して、急速度で落ち初めた。

僕はもう夢中だ、何をしたか分らない。何でも、いきなりハンドルにつかまつて、何かしたやうにも思ふ。

全く天佑だつたねえ、機が墜落したところは、柔い葉のこまかに密生して居る楊樹の林であつたので、機體が少々毀れた外に、僕の身體には別條なかつたんだよ。尤も墜落したときには僕氣絶して居たさうだが怪我は一つもなかつた。後で聞くと、飛行機は空中に二廻轉してひらりひらりと靜に落ちて來たんださうな。僕夢中で舵を動かして居たものと見える……。

× × × × × × × × × × × × × × × ×

英夫さんの長物語はこゝまで來て、ぱつたりと止みました。偉い坊ちやんですけれども、その時はこはかつたに相違ありません。ぢつと唇を結んで、その當時を回想するやうに頭を傾げて、うつとりとなさいました。

英夫さんの墜落した處はカレーに近い佛軍のある高等司令部所在地でした。敵の飛行機が落ちたと云ふので、最寄の兵士は群つて來て、飛行機から投げ出され、半ば木の枝にはさまつて居る英夫さんを扶け起し、種々介抱して樣子を聞くと、今のやうな話なのです。

兵士も驚けば、將校も驚く、司令官も土地の人も驚き呆れて、「天

來の日本飛行少年」の名は、忽ち軍中に擴がり、どこにもこゝにも大歡迎の大喝采でした。やがて間もなく凱旋將軍のやうな景氣で、お母さまの居らるゝ英國に渡り、やつと此の間、日本に歸られたので御座います。

父御の將軍はアントワープの陷落後、英軍に投じて、種々な戰功を樹てられたとの事で御座います。

將軍の名は……いやまだ交戰中の機密ですから、それ丈はお預り致しませう。（完）

飛行西遊記

一

飛行中尉武井菊夫が、日本の飛行界より姿を隠してからもう彼是五六年にもなる。

彼は日本の飛行界で上空三千米突に飛んだ最初の人であり、また宙返飛行を試みて成功した唯一の人であつた。

平常は落着いた優しい男だが、一度空中に上ると、別人のやうになつて、その猛烈果敢な思ひ切つた飛行振には、隊長をも同僚をも屢〻はらはらさせて居た。

彼はある時、高度のレコードを作ると云つて、密雲を裂いて上空遙に舞上り、いつ迄もいつ迄も降りて來ないで、地上の人を面喰はせた事もあるし、長距離飛行に命令區域外を飛廻つて大目玉を喰つた事もある。暴風雨に飛んで叱られた事もあれば、東京市街を非常な低空に飛んで專門家をひやひやさせた事もある。そしてその最後には、嚴禁されて居た宙返飛行を敢行し、たうたう軍規に觸れて二週間の謹慎を命ぜられて了つた。

固より上官の方では、彼の氣象や技能は十分に承知して居るので、罰と云つてもほんの形式ばかり、云はば可愛い子に灸を据ゑたと云ふに過ぎなかつた。

軍人の謹慎と云ふのは、昔の侍の閉門である。彼は靜かに此の二週日の謹慎日限を下宿の一室に閉ぢ籠つて、唯もう沈思默考冥想に耽つて居た。

やがて二週日は過ぎた。が、しかし彼の姿はとんと飛行界に見えなかつた。同僚の誰彼が、どうした事かと彼の宿に訪ねたら、宿の方でも切りに心配して居る處であつた。

『明日はもう謹慎が解けて出勤と云ふ前の晩に、こつそり隊長の處へ行くと云つてお出ましになりましたきり、お歸りがないのですよ。圖面見たいなものを一抱も持つて出られたんですが。いえ別に何の變りも見えませんでした、お室もお道具もそのまゝなんですもの、お服裝はいつもの背廣服でした。』

と、そこの女將は頭を傾げながら、とぎれとぎれに話した。

居間に通つて見ると、成程何の異狀もない。唯壁にかけてあつた世界地圖に、日本の中部から支那を横ぎり崑崙山脈を越えて、波斯の北から西へモロツコの北に達する北緯三十五度の緯度線上に、したゝか赤い線が引いてあつた。

『はてな。』

と彼の親友たる同期生の大町中尉は、ぢつと此の圖面の朱線に眺め入つた。

武井中尉の失踪はいたくも世上を騷がした。或者は彼が所罰に憤慨して外國へ走つたとも傳へた。また或者は、いや當局の內命を受けて歐洲戰爭の應援に出掛けたんだと云ふものもあつた。關西の一新聞には、とある山奧で頭を丸めた袈裟姿の彼を認めたと云ふ投書さへも載せられた。甚しいのは彼の自殺說を唱へて、內行に關する種々な情話を風評の種に上した雜誌もあつた。しかし世評の多くは彼の退隱を信じて、かゝる有爲な飛行家を失つたことを惜み、些細な杓子定規で、この天才を葬り去つた當局の短見を罵つた。

一年は間もなく過ぎた。二年三年、彼の消息は遂に杳として、世人はいつしかその過去の存在さへ忘れて了つた。

二

大正〇年一月一日、人跡絕えた××山の奧深み、斑の雪はさし上る朝陽に七彩の虹を放つて、新玉の年立ち返へる希望の光が、野にも山にも滿ち渡れるころ、突如、大獅子の吼るが如く、大鵬の群れ

飛ぶが如き怪音が、谿に響き谺を返して轟き亙つた。

『もう準備は出來ましたかな。』

かう云つて近寄つたのは眉目秀麗、見るからに氣高い一紳士であつた。

『はあ、只今推進機を廻轉して見た處であります。發動機には一切故障はありません。爆發も極めて良好で、別に申分はありません。』

毛皮の飛行服に身を堅めて恐ろしく巨大な複葉飛行機の側に立てる一飛行家は、直立不動の姿勢で、明晰な言葉の語尾を切りながら、かう答へた、

『それは結構だ、そして無聲推進裝置はどうですな。』

『はッ、御覽に入れませう。』

飛行家は素早く機上に上つて、二三のスキッチを捻つたかと思ふと、推進機は烈しく廻轉し初めた。しかも山岳を動かした先刻の爆音は少しも聞えない。唯見る眞白な推進機の影が光の如くに廻轉して居るばかりである。

『よろしい、では愈〻出發しますかな。いやまだ豫定の時間には三十分ある。あちらの天幕で、御別の紅茶でも飲みませう。今日は丁度一月一日、此の新年の目出度い日に、此の破天荒な首途を見るのは、實に愉快に堪へませんぢや。』

紳士は抱くが如くに幾度か飛行家の肩を抑へて烈しくその手を握つた。そして相共に天幕に入つて暖い紅茶の別盃を酌み交した。

××山中の高原に巨大飛行機を艤裝して、今しも出發の途に就か

んとして居るのは、五年以前に飄然としてその姿を晦まし、世人の疑惑を二重三重にした飛行界の天才武井菊夫である。彼は謹慎の二週日冥想に冥想を凝らし、遂に一大決心を以て帝都を立ち去つた。日本の樣な小ぽけな島國に蹋蹐つて何になる。一陸軍の爲の飛行、人と人との爭の爲の飛行ならば別にいくらも人がある。俺が飛行家たる天職は一個民族や、一個の局小な目的の爲ではない。世界の爲、人類文明の爲に自己の最善を盡さねばならない。さうだ俺は今迄天が俺に與へた眞の使命を悟らないでうかうかと過して居たのだ……。

頓語一番、かう思ひ當ると、矢も楯も堪らない。矢庭に必要な圖面のみを携へて、かねて信仰し知遇を受けて居る○○法主の許に馳せつけた。そして平素から企てゝ居る長距離飛行機の建造、無聲推進機の案出、それが出來上つたら世界一週飛行の壯擧など、細やかに熱心に說明した。

○○法主と云ふのは日本人には類のない大腹中の傑物で、その高貴の身を以てして、自ら前人未踏の不毛の蠻界に屢出入し、常に世界の發展と人類の向上とにその勇猛無比なる精力を注いで居る素破拔けた英雄僧である。彼は武井中尉の說明を聞いてその計圖を壯とした。そして飛行機を以て人畜の踏み得ない幾多の秘境を探らんと云ふ胸算を立てゝ、彼の庇護と助力を約したのである。

かう云ふ工合に武井中尉は、○○法主の庇護の下に一切の世上と交通を絕ち、熱心銳意その計圖に從ふことゝなつた。固よりその間には幾十度とない失敗の苦味を嘗め、幾月と云ふ時間を空費して、

漸く出來上つたのが、此の「大文明號」と名づくる飛行機である。

云ふ迄もなく何式と云ふ事はない、彼獨得の創意になつたので、外形の小さい割合に登載力が非常に大きい。五人の同乘者を乘せ、三挺の機關銃を据ゑ、糧食彈藥を十分に積み、三晝夜に堪へる油槽をも備へて尙餘りがある。無線電信の裝置も珍らしいが、特に變つて居るのはその翼を折り疊んで、極めて小さい容積にする事が出來、またそれを組立てゝ露營の際の天幕とすることの出來る事である。底部は船底式で、船底には乘組員の寢室や倉庫さへも設けられて居る。飛行中にも機上各部への交通が自由に出來る樣な安定裝置が施してあるし、無論陸上水上共に滑走する事が出來るのだ。

かう云ふ飛行機だから、山と云はず海と云はず如何な險難でも幾何學的一直線に旅行する事が出來るので、探險用として殆んど理想的と云つてもよい。特に軍事用としてはプロペラーや發動機の周圍に一種の瓦斯發散の裝置があつて、それが一時的の眞空を作り、爲にあの猛烈な音響を一切外界に傳へない事が出來る樣になつて居る。卽ち無聲推進裝置である。

飛行時間は尠くとも百五拾時間に堪へられるし、速度も百哩は出るから、一飛行の能力は一萬五千哩、何の事はない世界一週が一飛行で出來る譯である。

武井中尉は此の前代未聞の大飛行機を操縱し、五名の人々を同乘せしめて、今や中部亞細亞の探險に上らんとしつゝあるのである。

誠に之れ自然に對する人間の一大征服である。その成功と否とは、

人間能力の一大試驗である。彼は滿身に勇氣と希望を溢らせつゝ早や機上の人となつた。

同乘者四名、曰く、一行の世話役として探險隊の案內者たる花野十郎、地理天文の博士伊村長太郎、それから敏捷な茶目少年鈴木新七、これが一行の給仕役を勤める事となる。

三

薄雲を破つて現れ出でた旭は早地平線に輝いて、風も小凪の、飛行日和としては極めて好適の天候であつた。

『ぢや御氣嫌よう。』

『成功を祈るぜ。』

『しつかりやり給へ。』

『御土產をどつさり。』

なんどと云ふ聲があちらこちらに聞える。英雄僧は一段高い幕營地の丘に上つて出發の合圖を與へた。滑走僅かに十米突、機は早くも地を離れて、機上よりも、地上よりも、告別送別のハンカチが盛に振り廻はされた。

機は一直線に西へ飛んだ。五分十分、大鵬は鷲ほどになり、鷲は鳶になり、鳶はやがて雀となつて、十五分の後には全く視界を離れて了つた。○○法主は砲身の樣な細長い望遠鏡で、いつまでもいつまでもその行方を見送つた。

大文明號……之が此の飛行機の名稱である……が日本の空を離れ

たのは間もない事であつた。四千米突の高空を密雲を潜つて音も立たせず飛ぶのだから、地上の人は關係者以外に誰も知らなかつた。新聞も書かねば風評にも上らない。唯、機が日本海を横つて、例の振古未曾有の大海戰の跡を弔ふべく沖の島附近の低空に下つた時、折から通過せる汽船に認められ、それが疑問の裡に一種の風評を擴げたに過ぎなかつた。

一時間百哩餘の速度で飛ばすのだから、山も川も流るゝ如くに通過する。兀兀たる朝鮮の赤土山も時の間に過ぎて、青嶋の低空に舞ひ下り、イルチス、ビスマークの諸砲臺、巫山の附近を二周三周した時には、武井中尉も往年の勇戰を追懷して一種の感情を動かした。しかし一度空に上つて、蠢虫の群とも、天然痘患者の面構とも見ゆる地上の樣を眺めて居ると、豆粒のやうな青嶋要塞の偵察飛行に仰山にも死を決して、送るものも送らるゝものも握手に熱を罩めて、大眞面目の熱涙を絞つた事などが滑稽至極な馬鹿げた事のやうに思はれた。

『つまらない芝居だつたな。』

と彼は思はずも口走つた。

黄ろい水を越えた。綠の野を横つた、黑點點たる幾多の村落を通過して、もう彼是十時間になる。行程は確に千哩を越えて居る。北緯三十五度の緯度線に沿うて一直線に飛行する計圖であつたが、さて上空に上つて見れば、大洋と同じく氣流の河もあれば、危險極まる眞空の箇所で、大海の暗礁とも云ふべき氣囊と云ふものがある。

眼に見ゆる潮流岩礁はないにしても、それと等しい幾多の險難が横はつて居る。武井中尉は巧にこれ等を避け、或ときは迂廻し、或ときは突破して西へ西へと行進した。

青島を出てから或る目的の爲に機は直ちに北京を指して進んだ。眼下には山東の沃野がある。伊村博士は望遠鏡と手帖を忙はしく動かして何物かを記錄した。北京城上を一周してそれから例の萬里の長城に沿うて豫定の航路を突き進んだ。

一行の茶目給仕鈴木少年は先刻より切りに尿意を訴へて居たが、機が××城の中央とも見ゆる地點に來たとき、突然ぢやあぢやあと水鐵砲を發射し初めた。

『おい馬鹿な事はよせ。こゝは宮城の上だぜ。』

と武井中尉が叱りつける。

『だから面白いんです。下に居る人間は、天から神水が下つたと喜ぶでせう。少し臭いには臭いが。』

と茶目君すましたもの。

『なあに、この位高けりあ下界に屆く迄に蒸發して了ふ。さうでなくとも雲や空氣が吸收するから差支はない。』

と博士は笑つた。

出發すると直ぐから眠りこけて居た探險家の花野君は、このとき眼を覺まして無意味に哄笑した。そしてちよつと下界を覗いて、

『やあ愈、胡北にかゝつたな。君、あの白蛇の蜒つてるやうなものね、あれが卽ち萬里の長城だ。』

と吸鳴り立てた。

武井中尉は見るものが皆珍しかつた。そして必要のない限は、低空を飛んで、心の限り異域の風光を樂んだ。一望千里とでも云ひさうな綠の沃野が、山の裾から裾に連なつて居る。その間間には有史以前からその儘で居るとも見ゆる遊牧の民の饅頭形の天幕が、印度更紗のやうに點在する。長い長い駱駝の列、眞黑に集つてる牛か馬か家畜の大群、赤い花白い雪、或は枯野の荒涼たる、あるひは沃野の綠深き、春も夏も秋も冬も一つの縮圖に纏つて居るやうな夢幻の境……彼は握りしめたハンドルの手をいつしか忘れて、機の不意な動搖に我と氣がつく程にも、これら大自然の奇巧に見とれて居た。

四

機はやがて眞黑な密雲に突き入つた。行けば行く程それが愈〻濃厚になる。五分十分と進んだころは、光と云ふものは全く覆はれて了つて、全然の眞黑闇、腕につけた時計の針や磁針さへ見る事が出來ない。

『怖しい雲だな、學問上でもまだ聞いた事はない。』

と博士は叫び出した。その刹那、怪しい雲は縱横に裂けて、紫電閃き、百の雷霆が一時に轟き初める、拳大の大雹が猛然として襲ひかかつた。

恐しい大雹である。何の事はない四十七ミリ速射砲の前に突立つた樣なもの、翼の各部は見る見る內に突き破られ、幾條の鋼線さへ

切斷せられた。愚圖々々して居れば推進機さへ折られさうだ。此場合の方法としては、降雹の圏外に逸出すか、より上空に上るか、下降着陸するかの外はない。されど何處が降雹の區域であるか分らないし、上るには早や上舵の鋼線を切られて居る。止むを得ず着陸と決めて、急角度に下降し、もの〻二千米突も下つた頃、ふと雲の切れ間より下界を見下したら、下は一面に漫漫たる大洋で、山のやうな滑かな大濤が彼方此方に隆起つて居る。

中尉は思はずも叫ばざるを得なかつた。

『海だ、失策つた。』

一同は愕然とした。

しかし遉に探險家たる花野は、それが海でなくして一大沙漠である事に氣が注いた。

『沙漠です、構ひません着陸しませう。』

『あゝ沙漠ですか、さうですな、では。』

かう叫んで早くも彼は着陸の姿勢をとつた。

雲は忘れたやうに霽れて、機翼を滅茶滅茶に打碎いた大雹も今は過ぎ去りし夢のやうである。機は靜かに沙漠の眞中に降り立つた。

東西南北悉く沙である。大浪と見えたのは幾百となく亂立した砂丘で、滿目すべて荒寥、草一本の青いものを見る事が出來ない。日はもう西に傾いて、それが燃え立つ陽炎に反映して繪の具では現はし難い怪奇な色彩を呈して居る。天も黄ろく地も黄ろく、雲と沙とは相接して、天地は唯夢の國の不可思議な夢を孕んで居た。

五

測量の結果によれば、地點は北緯三十九度四十分東經八十八度三十二分、正しく支那甘肅省の西羅布沙漠の眞中である。

沙漠に下り立つた一同は協議を凝らした。かう云ふ沙漠なら毒蛇猛獸の患はないから安心だ。しかし人里に出るには十日や二十日の行軍を要するので、とても實行は出來ない。ともかくも飛行の出來る程度に破損の箇所を修繕するの外はないと云ふ事になつた、それで不完全ながらも積んで來た豫備材料で翼の破れやら鋼線の切斷された處を補綴つて見た。思つたより破損の程度は輕い。これならば大丈夫と云ふので一同元氣を恢復し、その夜は飽迄も廣漠たる沙漠の大廣間に足腰延ばして野營の天幕を張る事になつた。

『いや、かう云ふ所に居れば天上天下唯我獨尊、國境とか兵備だとかの面倒は一切ない。男子鄕關にあつて名を成す能はずんば、かう云ふ大沙漠の主となつて心の限に長嘯するのも痛快ぢや。』

と武井中尉は嘯いた。

『沙漠だけに沙を攫むやうな御話ですな。』

と半疊を入れたのは花野探險家であつた。彼は往年この邊の沙漠横斷を試みて、水の缺乏と人夫の不平とに苦しんで、幾度か死生の境に踏込んだ經驗があるのである。

『この邊の沙の下には上古の都會が埋沒つて居る筈です。私の此前の探險は、旅行その者の困難の爲に失敗しましたが、かう云ふ飛

行機があればもう大丈夫だ。沙漠なんかは恐しくはありません。併し私の旅行當時はかう云ふ幕營は實に心細い不愉快のものでしたよ。諸君は明日にも水が得られる食物が得られると云ふ宛があるから、この沙漠の幕營も郊外散策の遊散のやうな氣持でせうが行けども行けども何の手堪へもない沙の原を、飢渴に苦しめられながら不安の旅を續ける心細さは何とも云へませんよ。』

一同は實にもと謹聽した。そして飛行機の恩惠、文明の恩澤をしみじみと感謝する氣になつた。

『成程かうやつて來て見れは、人間が開拓しなければならぬ自然はまだまだ無限にある譯ですな。小ぽけな土地や權利を爭つて、人と人とが戰を初めるなんて、つまらない事だと悟りますなア。歐洲戰爭のあれ丈の努力と資材とを以て交戰國の人々が相共に不毛未開の地を拓いたら、どれほど全人類は向上發展するでせう!! 地上の開拓が終つたら天上に手を擴げるまでの事、我々人類のなすべき任務は、かう云ふ沙漠に立つて居ると、無限に大なる事を感ぜずには居られません。』

溫厚な博士は飽迄も沙漠の大自然に打たれたやうに激越した調子で語り出した。

話はそれからそれと打續いた。血の垂るやうな眞赤な月は遙かの沙丘から這ひ上つた。

『あゝ綺麗な月だ!! 熟し切つた西瓜のやうだ。』

と茶目君は躍り上つた。

一同は興じ切つて、やがてこの奇異なる元日の夜を飛行機變形の幕營に眠つた。晝の疲にどれもこれもよく寢入つて居る。

花野探險家が不圖眼を覺ますと、大雨は篠つくやうに降つて居る、幕營の側は早や小さな川となつて居た。大騒で一同を叩き起し、幕營地を移動せんとして居る處へ、何とも知らぬ大音響が遙か彼方より湧き起つた。やがてそれが地の底に轟くやうにも思はれる。つい眞近の沙丘が浮いて來るやうにも見えた。

『大變です、洪水だ、地下洪水だ。早く早く機上に機上に!!』

花野はかう叫んで、素早く機上に躍り上り、誰もかれも無暗に引張り上げた。そして矢庭に機翼を張つて發動機に點火した。

その一刹那、沙丘を運んで來た大洪水は崩るゝ如く殺到して、飛行機諸共、恐るべき速度で押し流した。

九死に一生を得た一同は洪水の流に乘りながら自他の幸運を祝し、この不意な恐るべき洪水に眼を睜つたのである。

『沙漠に雨が降ると、吐嗟に洪水になるとは聞いて居ますが、これ程とは思ひませんでした。實に壯大ないや物凄いものですな。一體沙漠の洪水は地上に出る事もあれば、地下洪水と云つて、地下に起る事もあるのです。大沙丘を動かし流すのは此の地下洪水で、今夜の最初の内が即ちそれでした。それが支へて居る地表を破壞し地上洪水となつたのです。いや實に怖いものですな。』

かう云つた説明を伊村博士が講じつゝある間に、天に漲る樣に覺えた洪水はまた何處かに隱れ果て、機が停止したときには、不思議

や最早何處にも一滴の水を求むる事が出來ないもとの沙漠そのものとなつて了つた。

『夢のやうだ、いや天の魔術だ。』

と一同は呆氣にとられて再び天幕を張つて眠についた。

六

大雹の襲來と、洪水の出來事に、機の主要部に修繕を要する箇所が出來るし、準備品の大半を失つて仕舞つたので、この上、豫定の大距離を飛行する事が出來ない。止むを得ずこゝから最も近い印度に飛んでそれ等の修繕や補充をする事に決定した。武井中尉は尠からず失望したが花野探險家と伊村博士は大いに悅んだ。なぜならば、印度に行くには千古の秘密國西藏を天空から見る事が出來る。加ふるに世界一の大高山ヒマラヤを通過する事が出來るからだ。

それで翌二日、屠蘇も雜煮もない沙漠の夜明が黃ろく明離れた頃、爆音高らかに舞ひ上つて南に向つて行進した。

飛行旅行にとつては沙漠は思つたより狹い。間もなくその南端に出でて、崑崙山脈の峻嶺が屏風の如くに突立つて居る頭上を飛び越えた。山蔭には獅子が徘徊して居る。翠深い湖の面に大蛇の遊泳して居るのさへよく見えた。

給仕の茶目さんは無暗に喜ぶ。伊村博士と花井探險家は忙しく手帖に鉛筆を走らせて居た。

西藏に入つてからは山川の面目が悉く一新した。奇怪な高塔が思

もかけぬ處に突立つて居るし、黄紫紅白の花は得も云はれぬ美觀を呈して野に山に爛熳として居る。人と猛獸とは相共に戯れて、茲ではあらゆる生物が何等の階級もなく、敵味方もない樣に思はれる。彼等は爆音高く天馳る怪物の影に驚いて、家に逃げ込むものもあれば、森深く隱れるものもあつたが、大部分は何れも空を仰いでこの大怪鳥の行方を凝視めた。

見馴れぬ奇怪な同類に驚いて鳥類は殘らず姿を隱したが、それでも大鷲の二羽三羽は偵察するものゝ如くに機に前後した。そしてやがて素破らしい高速度で何れへか飛び去つた。

と見るまに巨大な森が動き出したかと見ゆるやうな大鷲の一大群が機の前途に立塞つた。何萬と云はうか何十萬と云はうか、見ゆる限りの空を蓋うて、黑雲の如くに押し寄する。

機上の人は、直ちに之が敵意ある鳥群の挑戰と見て取つて、手早く射擊配置についたのである。ものゝ三分間も經たない裡に、機は早くも大鳥群の眞中に突入つた。豆を炒る如き射擊は三箇の機關銃より發射せられる。無數の鳥はばらばらと射落されて、西藏の地上は、創世紀以來、曾て見た事のない鳥の雨が降り出し、散亂した羽毛は吹雪の如くに湧き起つた。激戰五分、遠の大鷲の集團も散々に打ちなやまされて、一行はこの振古未曾有の大狩獵に大歡喜の叫を恣にしたのである。

しかし機にも多少の損害はあつた。翼は幾ケ所か彼等の嘴に裂かれて、動もすればその安定を失はんとした。しかし武井中尉は大膽

なそして最も巧妙な操縦を以て屢、危機を避け、い、、とある高原に着陸して應急の修理に取りかゝつたのである。

『面白かつたなあ、重量の制限さへないなら、あの鷲の二三羽も土産にするがなあ。』

と茶目さんは尙夢心地に騷いで居る。

そのとき突如、目の前の森蔭から、けたたましい唸聲が轟いた。

『獅子だ!!』

と花野は叫んだ。機はまだ修理が出來て居ないので地上を離れる譯に行かない。大鷲の襲來を逃れた一行は、又もや地上に於て獅子の大群と戰はねばならぬ運命となつた。

『武井中尉と茶目公はそのまま極力機翼の修繕だ、僕と花野君とは射擊だ。早くしないと危いぞ。』

と博士は號令をかける。大なる老獅子は牙を鳴らして、早や十間もない處に迫つて來る。

覘ひすました花野の一彈は、見事その獅子の眉間に命中した。山岳を撼がさん許の叫に、最後の悲鳴を擧げた彼は、その儘大地にのたを打つた。しかしもうその時右からも左からも前も後も幾十の獅子が無二無三に突擊して來た。

一同は早や生色はない。盲滅法に機關銃を連發して所謂亂射を行つたのである。幾頭の獅子はばたばたと打ち倒されたが、彼等の內の勇者と見える三四は凝りずに、尙突進する。機體は早くも大獅子の牙にかゝつた。銃で間に合はない機上の人は日本刀の鞘を拂つて

その前脚を切り落した。

一旦退いた獣群は、又もや數倍の勢を以て突進する。人々は早や疲れて、大鷲の襲來には愉快な狩獵を試みた人も、地上孤立の地だけに最早や此の猛獣の威力を防ぎかねて居た。

獅子は勢に乘じて間近に迫り、中にも一頭の老獅子は機上に飛び込まんと身構する。

危き一刹那！

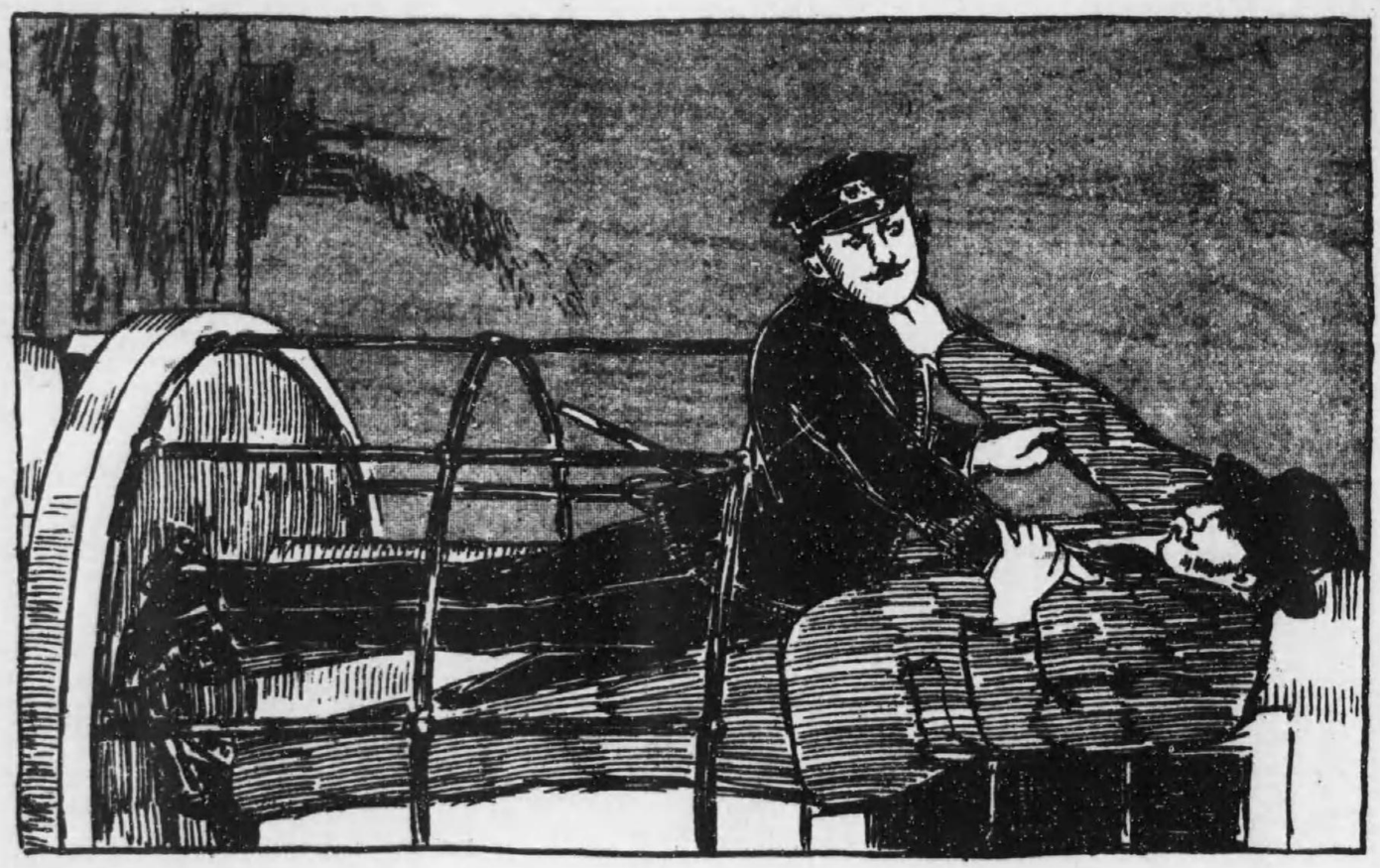
推進機は俄に怪音を立て機體はゆらゆらと地上を離れた。幾多の猛獣は一ケ所に集つて盛に吼えたが、もうどうする事も出來なかつた。

武井中尉は爆音を止めて一同に向つて云つた。

『之が人間と自然の戰です。人間はまだまだこんな戰を幾百度も繰返さねば人類が全部地球を征服したとは云へません。』

地上を見れば、草も岩も鮮血慘澹として、射倒した十幾頭の獅子は物凄い喊聲を立てゝ、あちらこちらに轉がつて居た。

《をはり》



無點火燈臺

一

「事實か小說かつて、野暮な事を聞くな、よしやそれが事實だからつて、俺の口から斯樣々々の事柄があつたと云へるかい。無論小說さ、だから貴公に話して聞かせるんぢや。いゝかね。」

かう前置して談し出した一場の物語がある。談話者は、某驅逐艦の艦長M少佐と云ふ、鬚の中から鼻と口とを突き出したやうな赤ら顏の猿面冠者、もう可い加減ウヰスキーのコップを重ねて、熟柿臭い管を卷きながら、無暗に卓子を打擲る。

『何でもいゝからやれ、神妙に聞いてやらう、面白くさへあれば、事實だつて小説だつて構はん、面白くなければ欠伸するまでだ。』

先刻から、取摑つて可い加減對手を仰付けられた僕は、元來の下戸だから、もう少々參つて居る。特に少佐の氣焔はもう毎日聞き飽きて居るので、希くば大抵の處で切上げたいと考へて居たのだが、談上手の彼は「天下の珍談だまあ聞け、是非とも聞け、聞かなけあ貴公の職務に關係する」と銘打つたので、そこは商賣柄の助平氣、また御輿を据ゑる事となつた。かうなると矢でも鐵砲でも持つて來いだ。夜が明けやうが、ウキスキーの壜が幾本倒れやうが、いやもう背水の陣構。醉拂の管なんか毫も恐れん、さあ來い來れ、いくらでも聞いてやる。

『貴公活動寫眞を見た事があるかの？』

こんな奇問が突然少佐の口から溢り出た。遺に度胸を据ゑてかゝつた僕も之れには少からず面喰はざるを得ない。なぜならば、讀者よ、此僕なるもの、活動寫眞と來ては目も鼻もない大好物、從つて自ら任じて居る通人なんだから、

『それがどうしたんだ。』

僕の聲は思はず筒拔けた。少佐はしたりげの面持で

『活動なんて下らないもんだねえ、俺がこれから話して聞かす事實は……オツト小説は、活動寫眞なんかより遙かに奇拔で遙かにセンセーショナルなものなんだからな。えゝと、忘れもせぬ去年の秋だよ、そしてつい目と鼻の日本に於ける出來事ぢや。』

少佐はまたコップを取上げた。そして幻を追ふものゝやうに眼を据ゑて、眞黑な空を凝視めた

『丁度今夜の樣な夜ぢやつたぞ……あれは。』

二

九州の南端から、北海道へかけての海若を驚かした海軍の大演習も、もう第二期に入つた。攻防の兩艦隊は、各その主力を集結して、大衝突の時をまつて居る。攻擊艦隊は既に行動を開始した。

雨の烈しい闇の夜、攻擊軍の司令長官B中將は突如、その根據地から全艦隊の拔錨を命じて南へ向つて航進する。港口數浬の沖に哨艦として遊戈してた驅逐艦Sの無線電信室は忙しげに技師が手を動かして居た。

『うむ、B艦隊は今より××に向つて出動する……か。N驅逐隊は今夜△△の襲擊……はゝやるな。處で俺の艦は本隊の露拂とござつたな。なにF岬を通過し終らば、本隊に合して、その後尾につけ、馬鹿にしてやがる、愈〻お伴とけつかるわい。仕方ない、命令だ。眞暗な波と睨つこしてるよりいくらかましだ。』

無線電信の飜譯文を讀み終つたM少佐はかう呟いて、直ちに命を傳へる。艦首は南に振り向けられ、機關はより烈しく鳴動して、艦首は盛に波を切り初めた。

波は穩だが、濠雨は可なりに烈しい。艦の闇、海の闇、一間の先は何にも見えない。

寂莫したものである。艦橋の當直將校も無言なら、按針手も無言、各配置についた哨兵も亦無言で、轟々と鳴る機關の響と、切り裂かるゝ波濤の叫のみが此單調な闇の物の音である。

少佐の頭は、いま、種々な空想に取圍まれた。

どうしてもこれが演習だとは思はれない。もう數時間すれば△△の港口には鋭い探照燈が闇を貫いて、パッパッと赤い火光が閃き渡る、毛布を叩くやうな速射砲の響が陸續して、チヤブリチヤブリと水柱が跳ね上る、アッ、兵が一人やられた、やアまた射たれた。それ來たぞ、彈だ、血だ、火だ、叫喚、大叫喚、眼は血走り腕は自ら振ふ……亂闘の光景も思ひ浮べられた。

闇や波や風と闘ふ海軍の行動はいつでも實戦だ、演習ではない。

もし不可抗力の過失があつて艦を失つたらどうする、艦隊が列を紊して、各自が衝突したらどうする、全艦隊が針路を過つて淺瀬にでも乘り上げたらどうする。……

歐洲の大戦は既に開かれた。日本もいつ參加するかも知れない。その場合は演習ではない、實戦だ……いや今夜だつて實戦だ……。

こんな事を考へて居た少佐は、全身が自ら緊縮するのを覺えた。

そして艦橋に上つて當直將校に尋ねた。

『速度はどの位出てるかね。』

『さあ、二十二三位でせう。』

『さうか、では時間から云ふとF岬が近い筈だな。』

『さうですな、しかしまだF岬の燈臺光は見えませんよ。風が逆で

したから少し遲れましたかな。』

『いやそんな筈はない。もう岬に來て居る筈だ。』

『しかし、F岬の燈臺は廻轉光で、此位の闇なら少くとも五浬沖から見える筈ですから。』

こんな問答が兩將校の間に交はされて居るとき、艦首の哨兵は突如金切聲を張り上げた。

『艦首に黑いものが見えます。岩……、岩があります。』

兩人はハットして闇をすかした。當直將校は手早く夜間望遠鏡を取り上げた。

見ると、艦首の方向僅の距離に巨人の樣な岩礁が突立つて居る。右舷にもまた凹凸した幾つかゞ寢轉んで居る。

『やあ岩だ。危い、全速後退!! 取舵一杯だ。』

輕快な驅逐艦は、一時に全艦を身振ひさして、泡立つ白波の弧を大きく描きながら、鮫の齒のやうにそゝり立つ岩礁を右舷とすれずれに、漸く危險を免れた。

兵卒の二三は思はず萬歲を叫んだ。

三

F岬の燈臺光が見えないとすれば、少くとも陸岸迄は五浬以上の距離があるに相違ない。五浬の沖合ならば、此邊に岩礁がある道理がない。

『おい怪訝しいぞ、N君、こゝは何處かね。』

『さあ、岩礁の模様ではF燈臺の手前のH岩らしいですが、はてな。』

當直將校のN中尉は小首を傾げた。このときまで腕を拱て居た少佐はふと思當るものゝ樣に肩を搖がした。

『おい、君、F燈臺の灯が消えてるんぢやないか。』

彼はかう云ひながら、何だか水を被つた樣な氣持で、思はず慄然とした。

戰鬪艦四隻裝甲巡洋艦四隻より成る主力艦隊は、最早間近に迫つて居る。そして此の燈臺光を見當に針路を定めやうとしてるに相違ない。ひよつとすると我艦と同じく燈臺光の見えない爲に針路を迷つて、この陸岸見掛けて乘りかゝりはしないか。H岩附近は、數多の岩礁が猥の齒の樣に簇出した名題の惡所である。一旦この群礁の散布區域に乘り込んだら、小艇ならともかく、戰鬪艦の大を以てしたら、とても免れる事じやない……座礁……破壞……沈沒……叫喚……大叫喚……これは大變だ!! 容易ならぬ一大事だ!!!!

『おい無線電信　無線電信。』

と叫びながら、彼は自ら大股に無線電信室に馳け込んで、旗艦へあてゝこの顚末を報告した。

艦は徐行して岩礁の間を縫つて進んだ。

果して、こゝはH群礁なので、間もなく一段高いF岬の燈臺が闇の中に巨人の如く高く聳へて居るのが、視界の裡に入つた。

『おい、N中尉、見給へ、燈臺に灯がついてないぜ。奇怪ぢやないか、愈〻不思議だぞ!!』

彼は直覺的に燈臺の中の變事を豫想して、どうしても之れは、自ら偵察しなければならぬもの〻樣に感じた。そして部下の止むるのも聞かず、二三の兵を引具して、艦載端艇を下して燈臺の脚下に漕ぎ寄せた。

四

少佐は當時を想ひ起す如く昂然として談り出した。

貴樣知つてるだろう。弓なりな日本の、その張り上つた鼻端に突き出して、南と北とに本州の海岸線を分つてるF岬、いつも可なり荒い白波が岸を嚙んで、亂抗齒の鋭きを彌が上にも磨ぎすまして居るF岬、その尖端の大きな礁に岬と同じ名のF燈臺と云ふ、此の邊の航海者に取つては守本尊とも云ふべき燈明臺があるんだ。燈臺のある礁は陸續ではない。飛石の樣に連つたF岬の岩礁の一つで、大きな岩壁の上に突立つてるんだよ。その岩壁と云ふやつ、殆んど直角に切下したやつで、基脚には尖つた石が無數にそゝり立つて居る。だから波の荒い時なんかは、とても側へは寄りつけるものではない。それ故燈臺と海上の交通器としては、此岩壁の上から長い横木を出して、其端に丈夫な鋼の繩梯子がかゝつて居るんだ。無論不用のときは引込めて置く、訪問者がある時、燈臺員が、この横木を繰出してくれる。訪問者はこの繩梯子を持つて上るか、又は釣籠の仕掛で燈臺に這入る事となつて居る。

俺は、前にも二三度、此燈臺は訪問した事があるし、略案内は知

つてるんだから、例に依つて、この岩壁の下に艇を寄せて叮嚀に來意を述べたものさ。處が燈臺では何の音沙汰もない。怪訝しい。今度はメガホンを口に當てゝ呶鳴る。一向に通じない。一二三で水兵も一緒に五人掛でわめき立てた。それでも何の返事がない。愈〻變だ。確に燈臺内に變事ありと確信した俺は水兵を集めて危い人梯を作つて、岩壁の割れ目を利用し、やつと這上つたものさ。

無論上つたものは俺一人だ、此一人がやつとの事、しかも波が靜かだつたから成功したものゝ、いつものやうに白波が岩を嚙んでるときだつたら、とてもとても攀ぢ上る事なんか不可能なんだからな、ナニ水兵か、水兵は何れも艇に殘して萬一の變に備へて置いたよ。

そこで燈臺の入口に行くと、何とした事だい、入口は明け放して中は眞暗だ。

ハテナと思つたが、それでも二三度、聲をかけて見た。矢張應じない。何だか一寸氣味が悪くなつて來たね。しかし最早躊躇する場合ではないので、直ぐその入口から闖入んで用意の懐中電燈を點じて見たらどうだい。君、どうだと思ふ。

五

室内に這入つて見ると、脚の折れた卓子が座礁した難破船のやうに傾いて居るし、椅子だの煙草盆だのその邊の什器が、無暗矢鱈に、また亂雜に取散らされて居る。

狼藉の跡……搭闘の跡……いや決して唯事ではない。

一體この室はたしか、此の燈臺の事務室兼應接室とも云つた所で、奥には物置があつた筈だ。この上が燈臺員の居住室で、またその上が燈火室だつたと記憶する。頭數か、さよう、主任が一人と助手一人、他に一人の老僕が居た筈で、約一ケ月毎に交代する事になつて居るとか聞いて居た……が、今こゝには人ッ子の息さへ聞かれないぢやないか。

俺は幾度か驚いたね、唯ならぬ室の有樣ばかりじやない、暗りを探りながら進むと、突如顏の前に飛び込んで來たものがある。遁の豪傑ハッとして一足下つたね。しかしそれが猫だと氣がついた時は我ながら苦笑を禁じ得なかつた。

無論かうなると、俺の好奇心は猛烈に動き出した。事の眞相を確めたい、事實を取調べたいと云ふ探偵慾が旺に湧いて來たが、まてよ。何よりも大切なのは燈臺の點火である。今數分を誤れば大變な騒となる。帝國海軍の精鋭に容易ならざる大事が持ち上る……今は一刻も猶豫すべき時ではない。と氣がついて、矢庭に階段を驅け上らうとして、躓きさま、床の上に手をついたら、ニタッと掌にねばりついたものがあつた。すかして見ると血汐……君……眞赤な血汐ぢやないか。

俺は一足飛に階上に飛上つて無暗に呶鳴り立てた……しかし四邊は依然として寂寞、何等の反應もない。仕方がないから、そこを素通にして、いよいよ三階の燈火室に辿りついて懐中電燈で探り見れば、どうだい、燈火器は無慘に破壞されて居るんぢやないか。輸油

管だの反射鏡だの火光の調節器、霧中信號の器械だのゴテゴテした道具類が、悉く破壞し盡されて、四周は何の事はない道具屋の店先に馬でも乘り入れて、掻き廻したと云ふ形態、俺はしばし呆氣に取られざるを得なかつた。

無論故意の破壞に相違ない。何物の仕業だらう、燈臺員の亂心か、闖入者の狼藉か、そしてまた何の爲に此の破壞を試みたのだらう。職務上の爭鬪とも見えないし。油盜人か、器械泥棒か、いやさう云ふ盜賊の行爲とは思はれない。どうしても故意に燈臺の火を消さうと企てたものに相違ない。さあ、それとすれば何の爲であらう、何の目的があつて燈臺光を消す必要があつたのであらう!?

俺の頭は咄嗟の光景に面喰つて、何等の分別もつかずに、徒にいろんな推測の絲を手繰つて居たが、今しもそれが艦隊の大演習の事に思ひ及ぶと、いきなり混棒で後頭を打擲られた樣な心地となつた。

何者かゞ、今夜我艦隊のこの岬を通過する事を知つて居たのぢやなからうか、そして艦隊の行動を妨碍しやうと企てたのぢやなからうか……燈臺光を消して、艦隊を日岩礁に追込んで、帝國海軍の精鋭を全滅せしめて……某國間諜の恐しい陰謀……

さあ、かうなると矢も楯も堪らない。艦隊は、もう危險區域に間近に來て居る。一刻も早く點火しなければならない。俺は咄嗟に決心して、そこらの木片や何かを寄せ集め、それに火をつけて、間に合せの燈臺光を作り出さうと努力した。それで先づ階下の倉庫に飛んで行つて石油を探り出し、椅子の破片やぼろ屑なんかを拾ひ集め

て愈〻點火しやうとしたとき、艦隊から發する霧中信號の汽笛が闇を破つて狼の唸るが如くに聞かれた。

正しく艦隊は間近にある。よし俺は今帝國海軍の危機を救つてやるんだぞと大に得意で……その實は非常な不安に襲はれつゝ……ポケットからマッチを取り出して幾度かすつて見た。濕つて居たものと見えてなかなかつかない。焦りに焦つて五六本も一緒に擦りつけて居るとき、後の方にすうッと物の氣勢がして、黑い手のやうなものが突如俺の首に卷きついた。

六

無論俺だつて神經はある、尠からず驚いたには驚いたが、來た時より多少の覺悟と注意をもつてゐたから、驚くよりもむしろ「扨こそ」と云ふ心地が沸き上つた。

さてこそ曲者と思ふ途端に……かねて練習して置いた柔道の御蔭さ、無意識に俺の手が動いて、首を卷いた手を握むより、肩越しに背負投の一曲、大分巨大な圖體が、大きな響を立てゝ打倒れたね。占めたと抑へにかゝつたら、此の怪物中々馬力がある。すぐ跳ね起きて、俺の喉佛を壓へつけるぢやないか。

俺はこの咄嗟の動作に曲者が日本人でないと見拔いて、更に一種の驚愕と勇氣を振ひ起したよ。

何故つて、日本人なら擲り込んで來るか、首を絞めるにしても、まづ衣物の襟を握むに極つて居る。處が外人の喧嘩は、第一にこの

喉佛を拇指で壓へる奴さ、そら、活動寫眞にある毛唐取組合でも大抵さうぢやないか。

毛唐だとすると、こいつ尋常の曲者ではない、國家的の大事に關係ある曲者に違ひないと思つたから、俺も早や一生懸命さ、講談風に云ふと上を下に組んづほぐれつと云ふ處だが、その實は、唯双方、我武者の力競べよ、別段餘計に動いた譯ではない。やつと曲者が立ち上つたから、俺は得意の腰車を一本喰はして、逃げやうとする處を追ひ縋りざま、燈火臺の外廊の手欄に壓へつけた。

雨空の眞の暗だから、顏は判らないが、確に毛唐人に相違ない。素破らしい巨大い奴である。鐵の欄干につかまつてなかなか離れないばかりか、動もすると、俺の五體を持ち上げて欄干から下に投げ落さうとするのぢや。

欄干の下は海だか口だか知らないけれど、とにかく斷崖數十丈の高さだ。墜落したら命はないに極つてる。こゝでもまた懸命の格鬪が演ぜられた。

しかし俺はとうとう彼奴の爲に抱へ上げられたよ、とうとう斷崖數十丈の高い所から投げ落される運命となつたよ……その危機の一刹那……。

身を逆さに抱き上げられた俺の手は、不圖欄干の下側の鐵棒に屆いた。無論半は無意識にそれに獅嚙みつく、同時に脚は何だか曲者の下腹に巴投のときのやうな工合に當つたらしい。

その瞬時、この高い樓上から墜落したのは、俺ぢやなくつて、曲

者それ自身であつたのだ。危ない藝當、全く夫祐と云ふ所だね。

七

少佐はこゝまで談して、身を慄はした。成程珍談である。或る意味から云へば探偵物の活動寫眞よりもセンセーショナルな分子に富んで居る。僕は思はず膝を乘り出して好奇的な利耳を突立てた。そして冬の夜の爐邊に老爺の物語を聞く子供達のやうに

『それから、それから。』

と談話の續を焦き立てた。

『すると、曲者の方がやられたんだな、一體それや何者だい。そして君には怪我はなかつたのか。』

『御蔭樣で、全然の無事よ、少し位の擦むき傷は出來たがね。』

少佐はまた悠然として談り出した。

格闘の初から終まで、兩者とも一切無言であつたが、曲者が墜落する刹那。

「マイン、ゴット」(直譯すればお、神樣即ちアレとかオヤとか云ふ驚きの感投詞) と云ふ悲鳴を上げた。言語は正しく獨逸語である。

少佐は直ちにそれが獨人である事を知つて更に驚愕を深くした。

艦隊の霧中信號汽笛はもう手に取る樣に聞えて來る。少佐は狂ふが如く再びポケットを探つて殘餘のマッチを一緒に擦りつけ、やつと、石油を注いだボロ布に點火した。

火焔は一時に烈々と燃え上り、火光は十分に海上を照らす事とな

つた。

無論この火光は艦隊より見えたに相違ない。曩に少佐が發した警電で、探るが如く徐行しつゝあつた艦隊は、F燈臺の火光を明かに認め得たので、一連の汽笛を殘して無事にF岬を南に通過する事を得たのである。

少佐は思はず萬歳を大呼して艦隊の無事を驚喜した。

『僕は思はず躍り上つたよ。そして危く欄干の外に墜ちやうとしたんだよ。むしろ先刻の格闘よりもこの方が危險だつたかも知れなかつた。はは……』

『さうか、いや實に奇談だね、つまり獨探の行爲だつたんだね、一體燈臺守はどうしたのか、曲者にやられたのか。』

『無論さうだ。どうして來たのかどういふ工合に闖入つたのかは知らないが、後で調べて見ると燈臺の主任は頭を割られて、階下の梯子段の後に屍骸となつて倒れて居たんだ。助手と老爺とは居なかつたので、嫌疑の種となつたが、後で聞く處によると、その晩、燈臺の要務でT町へ行つて居たんで、燈臺には主任のK氏が一人で留守番をやつて居たらしいんだな。』

八

帝國海軍にとつては恐るべき一大事件、しかもそれを未然に防いだ少佐の勳功は云ふまでもなく甚だ偉大で、彼の得意も亦頗る甚大なものに相違ない。しかしその得意が大である丈に、彼はまた極力

謙遜の言葉で、わざと平凡事の樣に現はす樣に努めたので、その說明もまた至つて簡單である。從つて玆により以上の、詳細を傳へる事の出來ないのは何となく殘り惜しい。

しかし、この事件が少佐の一身に及ぼした不可思議な結果は一寸傳へて置く必要がある。

演習が終つて、いざ講評と云ふ時になると、之れはまた驚くに堪へたり、少佐は手嚴しい非難の的となつた。彼の艦は××港攻擊の途次、先驅の哨艦たる任務を忘れ、恣に本艦隊を離れてその行衞を失した。從つて艦隊の作戰に違算生じ、艦隊の××港攻擊を不結果に終らしめたのだと云ふ。

そればかりではない、少佐が司令長官の命命を遵奉せず專恣な擧動に出で、特に勤務中服裝を紊したるは軍規違反として處分すべきものとして、三十日間の謹愼を科せられたのであつた。

『へえ、驚いたな、君は長官にその事件を報告しなかつたのか。』

『無論やつたのさ。事柄が事柄だから、極力祕密に報告して置いた。長官の爺さん眼を丸くして俺に感謝したものだぜ。君の御蔭で全艦隊が助かつた、いや國家の大損害が免れた、とねえ。』

『それだのに君はどうして、君は罰を喰つたのだい。』

『ハハ……そのとき俺は旗艦へどてら着のまゝ出かけたものだよ。服は格闘の際少し破れた處へ、お負けに石油を浴びたから臭くつて堪らない。生憎衣更を艦中に置いて居なかつたのでいつも着剛れた寢衣のどてら一枚でやつて行つたのさ……之は一寸內證の話

だが……驅逐艦生活はのんきなづぼらなもので將校連は艦隊附屬か軍港にでも居るとき、つまり人目の多い時でなければ大抵どてらよ。忍に服裝を紊した一件は即ちそれだね、罪は矢張罪、周圍への關係があるからね。

講評の非難にも一寸理由がある。と云ふのは此の騷で、豫定の時間が少しく延びた處へ、その日の曉、偶然の事から艦隊の前方に又一變事が起つたので、豫定の演習計畫が滅茶滅茶になつたからだよ。』

『どうしたんだ、それは。』

『話せば長いが、他の先驅の一驅逐艦はほんの偶然な事から恐るべき機械水雷の浮流して居るやつを發見したのだ。それで全艦隊は大騷動、矢庭に進行を止める。掃海を初めると云ふ大事件になつたのである。無論これも燈臺事件に關係があるに相違ない。從つて司令長官は全艦隊に令して一切を秘密に守らしめ。何とも知らぬ顏で演習を終つたのである。』

『さうか、ぢや八百長だね。』

僕は餘りに事の奇怪なのに呆れながらも、尙此のへらず口を忘れなかつた。少佐は愈〻得意に、しかもわざと平凡の語調で云つた。

『さやう、司令長官と僕とで打つた一芝居だね、長官の意は無論慰勞休暇の三十日を與へたと云ふ積だつたらう、艦を退いて自宅へ歸つて謹愼しろと云ふのだからなハハ……、しかし又一つは、僕がかゝる事件に好奇心を有つて、探偵みたいに物を搜索する性癖があるのを知つてるから、此の事件を一つ秘密に探偵させたいと

云ふ腹もあつたのだらう。無論俺は其時長官の本意を理解して居るが其休養と云ふ方面丈を實行して探偵と云ふ方面は一向に着手しなかつたよ。考へて見るとこいつは全然手に餘る仕事だし、到底俺の任ではないと思つたからね。云ふ迄もない。俺は一個の海軍將校だ、活動寫眞式の名探偵ぢやないんだからなあ。」

少佐はからからと打笑つた。そしてまたウキスキーの最後のコップを取り上げた。

この話の事件の少し後にF燈臺が强盜に襲はれて、燈臺守が慘殺され、器具が破壞された事は其地方の一新聞に仰々しく報ぜられた事がある。併し別段それが世の注意をも惹かず、中央の新聞界では何等の問題ともならなかつたので、世人は直ちにその記憶から遠かつて了つた、因よりその事件の裏に、今少佐が漏らした樣な恐るべき陰謀や驚くべき事件が潛んで居やうとは誰も知るものはなかつたのである。

唯この事件の一ケ月後、横濱の居留地は獨探狩が初まつて、十數名の獨逸人が退去命令を喰つた事が、種々な噂の種を蒔いたのに過ぎなかつた。

《完》

犬祭

一

武藏野の空は寒う曇りて、枯野の風が徒らに石を吹き付て居る或日の事、正月も師走もない暢氣千萬な早稻田庭球館（庭球選手の合宿所）に珍奇な現象が現はれた。

放談が沈默に、笑聲が嘆息に、いつもの薩摩琵琶が悲しげなる讀經の聲と代つた。

憐れなるジョンが死んだのだ、……庭球選手の愛犬……生れてから三月にもならない弱々しいムク犬……早大コートで菓子を貰つた

り、球を喰へたりして、兄弟のエスや先輩のダッグと巫山戯て居た憐れなる動物……それが流行の感冒から大熱を起して遂々死んで了つたのだ。

二

丁度臨終の夜は凄い樣に星が光つて武藏野の風は猛烈に戸をならして居た。十時までは選手連も騒いで居たが、それから後は各〻の部屋に引上げて勉強して居るものもあれば、直ぐに寢込で了つたものもある、あちこちにはいぎたない鼾さへ聞へて來た。

鈴木は今冷い手足を縮こめて頭から夜具を引被つた處だ。目白の汽車は今しも遠雷の如く轟き去つて戸をもる風が悲しい音樂を奏して居る、身體が暖るにつけて少し許り膝を伸せば、突如飛上る樣な痙攣が脛の肉を喰い入つた。聲をも得立てず無理に足の拇指を曲げて痛烈な痛を堪へて居ると、涙がはらはらと滴れ落つる、痛いやら可笑しいやら、何だか心細くもなつて脛を揉んで居る內に此の夏亡くなつた御母さんの哀しい記憶がぼんやりと浮んで來た。

彦根の大地震に騒ぎ立てられた處へ、電報が飛んで來て、鎌倉へ急行した。兄貴が停車場へ出迎に來て居た。『どうですか、御母さんは』といきなり尋ねると、『まだ大丈夫だ、まあ途々話さう。』と云つたまゝ兄貴はすたゝ歩き出した。荷物は驛へ預けたまゝ、僕も後からついて闇い田舍道を急ぐ、話す筈の兄貴は飽迄も沈默で僕も又問返す勇氣がなかつた。……暗い門口から暗い玄關暗い廊下を傳つ

て奥の間の灯の光を見たときにはハツと足が止つた。『堅が歸りました』と兄貴が大聲を立てたので一座のものが皆僕を見た、母の眼蓋が僅かに動いて胸へ當てゝ居た手が片手丈だらりと下つた。僕は其手を壓へて沈默した……母はとうとう亡くなつたのだ……父は泣かなかつた、僕も泣かなかつた、拱いた腕が何だか痛い樣だつた……今年五つになる兄の子がいきなり泣き出して、臺所から老婢が飛んで來た……同時に女中連の泣聲が破裂した。

三

こんな記憶を辿つて鈴木は引入れらるゝ樣な念に耽つて居るとき、恠しい泣聲がどことなく漏れて來る、鈴木は再び鎌倉の哀しい夕を眼前に描いて居た、又哀しい唸き聲が聞へて來る、今度は余程近い樣だ

『兄の子がワツト聲を上げた……暗い次の間にバタ〳〵と足音がした……姉と從妹があゝ泣いて居る。』

と思ふとたんにけたゝましい引釣る樣な叫聲がする。

『ジョンだ。ジョンだ。ジョンが危篤なんだ。』

と突立ち上つた鈴木は、其儘裏の犬小屋へ飛んで行つた。一つ一つの星が、鋭い風を射放す銃口の樣に見える。ジョンは長い舌を吐き出して唸き乍ら時々引付ける樣に總身を震はして居る、エスとエムは其尻の方に頭を重ね合せて寢て居た。

『ジョン〳〵。』

と呼んだら、エスとエムが頸を擡げて見て居たが、主人と悟つたと見へて同時に飛出してクンクン鼻を鳴らしながら膝に飛付いた。ジョンは一寸頸を振つた丈で立うともしない。身體にさわれば總身汗にしつとりと濡れて喉下がゴロ〳〵鳴つて居る、呼吸が苦しいのであらう。

『あゝもう駄目だ、ジョンは死ぬんだ。』

と、深い嘆息をついた鈴木は、ブルーツと慄へて、同時に「死」と云ふ觀念が彼の頭に壓倒して來た、彼は三度鎌倉の哀しい枕元を思ひ浮べて人の死と此の小さな動物の死とを考へて見た、「要するに凡ての者は皆逝けるなり」と云ふある文人の言葉をも思ひ出した。

青春の烈しい血汐にかられて運動場に馳驅する彼は込入つた未來など考へる樣に慣らされて居ない。此際にも矢張り死とは唯物の永久に消滅するものだと考へたのみである。死を哀しむ心は死ぬ當人ではなくして死を見てゐる周圍の人だと考へた、苦しいんだな、苦しいんだな、苦しんだな、揚句が死ぬんだ……人ばかりぢやない、……人も犬も凡ての物も……ジョンは今苦しんで居る、此苦痛が頂上に達すると、そこには死と云ふ妙な運命に包まれて了ふのだ……僕は御母さんの苦痛を見て居なかつた、僕が御母さんの手を握つた時は既に御母さんの死であつた、だから死と云ふものは唯怖ろしい哀しいものと許り思つて居た、……然るに此ジョンは、今は唯苦痛と云ふ事のみが堪へ難いので死と云ふものに恐怖も何もあるのでなからう、現在の苦痛を免れたい……あゝ僕等にも其心中はよく解る。

鈴木はかう思つて病犬の手を握つて見た、ジョンは苦しい聲を上げて鈴木の手を拂ひのける。鈴木はいきなり立上つて慄へながら馳去つた。風は今や正しく死んだ様、空には縱横に星が飛んで居る。鈴木はどこからか一挺の鉞を提げて來た、鈍い光が星の光に反射して持主の顏色は蒼白である。

ジョンは悶へに悶へて小屋をにじり出た、寸餘の霜柱はざくと崩けて鉞は空に閃いた。四面閃たり。

鈴木は其儘かけ込んで選手連を叩き起した。

四

翌日の午、庭球館の大廣間は時ならぬ法廷となつて選手中の法科生は大討論をおつ初めて居る、事件は「鈴木堅三郎飼犬謀殺の件」だそうな。裁判長のS君、檢事のT君、辯護人はI君Y君、他に當法廷の新制として陪審判事の文士M君とH君とが居る。

檢事が

『事實は既に明瞭です、先刻から度々も云ふ通り、鈴木は一昨夜葱を一束どこからか土つきのまゝ擔込んだと云ふ事だ、其でそれを相棒として犬を喰はうと考へたに相違ない。かくの如きは罪惡中の最も醜劣なるものとして重刑を要求します。』

と眞面目くされば、辯護士のI君

『いゝやそれあいかん、かねてから鈴木はジョンを非常に愛して居た、然るにジョンはあるに甲斐なき病苦に陷つて、死は却つて幸

福なりと云ふ狀態であつた、だから堅公が大慈悲心を起して其苦痛を助けてやつたのだ、決して罪惡じやない、むしろ一種の道德を遂行したに過ぎぬ、況んや殺して喰うと云ふ意志があつたとは以ての外だ、論より證據彼はジョンを殺害するや、狂氣の如く我々の寢室に飛込み大變だ〳〵と呶鳴り廻つて寢入ばなの我々を驚かしたぢやないか、是正しく彼れが悔恨の情にかられたる自首である、當時褌もない醜體で狼狽てゝ犬小屋に飛んで行き、兇行の樣を怖々と檢分し、しかも其歸途近頃は會計がケチケチして一向肉らしいものを喰はさんから、明日は一つあのジョンを喰つてやらうと仰せられたは、正しく當法廷の檢事T君だと記憶する、是即ち自己の青眼鏡を以て他人を誣ふるもので、本辯護人はむしろ滑稽と云ふよりも其沒常識なる所論を憫まざるを得ない……」

とまくし立てる。

丁度このとき、野球部邊から傍聽に出かけた彌次は一齊に騷ぎ立て拍手大喝采。

『よう〳〵。』

と呶鳴なるもの。

『檢事赤い赤い。』

と彌次るもの琵琶を叩くもの、はては、

フレーフレーフレー1……。

とやり出した。今迄新聞を讀んで居た陪審判事のM君も、餘りの騷ぎに眼をパチつかせて呆氣にとられて居る。

此時迄廷丁と云ふ役不足で、ぶつ〳〵云つて居たN君は突立ち上り、吉岡將軍の身振よろしくあつて

『諸君靜肅に觀覽あらん事を希望します（觀覽じやないと彌次るものもあり）……イヤ傍聽だ、傍聽あらん事を希望します、拍手の外一切の彌次を嚴禁します、（法廷で拍手はいゝのかと云ふものあり）あ……拍手は特別に許します……なあ裁判長、拍手はいゝ事にしやうぢやないか……夫から一人彌次ると其邊の人をも間違つて引出す樣な事がありますから、諸君は御互に自衞の爲注意して彌次を制してくれなければいけません。』

と、吸鳴りつけた、そのむかし早慶野球戰に於ける吉岡將軍其の儘の聲色である、滿場再び大喝采。

やがて靜まるのをまつてI辯護人が、口を開かうとすれば、今一人の辯護人Y君が

『まあ待つてくれ給へ今度は僕がやる。』

と立上つて、變挺な奇聲を絞つて、川上式の聲色を遣り出した。

『我輩はI辯護人と同じく無罪を主張するのでごわす（I君はまだ何も云はんといふものあり）……云はんければ我輩が裁判長閣下に要求すつとです。被告は其夜泣とりました。鈴木は有名な蠻勇家じや、彼が泣たとすれば正に鬼瓦の涙とでも云ふべきぢやらうと考ゆる人もあつか知らんが、實際泣とつたでごわす、我輩は以前に於て彼が泣た事を一度見たきりじや、時日は記憶せんが何でもマツチ前じやつた。鈴木の奴リユマチで腕が痛んだ時のこつて遠

の大將も手放しで泣いとつたぞ、丁度そこんの所の柱に凭れて……あんときやざまあなかつた……要するに彼の如きが泣くに至つては餘程の大事件でなければならぬ涙は凡ての罪障を淨化するちゆ事もあるこつじやから少くとも我輩否庭球館の刑法では其罪を論ぜんちゆ事にしたらよかと思ひます……な裁判長そつでよがつしよ。」

裁判長はもう倦いたと云ふ顔で、頻りにガットを捻廻して居る。

M陪審官もいつの間にか居なくなつた。傍聽人の一團には次の間でトランプを弄して居るものさへもある。

鈴木は無言で火鉢の灰に字を書いて居る、小春日向の南椽は暖かな日脚を入れてエスとエムとが嚙合を初めた。滿室の視線は其方にとられて法廷はそのまゝのおぢやん……。

鈴木はつうと立つて庭先に出た。

五

落葉の吹溜つた南の庭にはさゝやかな土饅頭が出來て、赤い山茶花が一枝其上につきさしてある、一炷の線香、カケ茶腕の水、一皿の牛肉、其側には野球部のダッグが寢て居る、エスもエムも、伊勢田も前田も、西尾も岩村も、澤田も中島も、針重も松田も山脇もその廻りに立つて居る。鈴木の一擊に、いゝや寒冒の大熱に生れて九十日の小さな肉體を破壞されたジョンが長への土となるべく葬られて鈴木や合宿の連中が、洒落氣拔きのいつにない眞心から、その小さな生靈を祭つて居る光景である、まめやかな關澤がどこからか茶

の花をとつて來て

『これがいゝ。』

と枝ぶりを直して居る。

水谷竹紫は引導を渡す役とあつて中央に進み出で、吊文を讀み初めた。武藏野の風は幾度か其原稿を吹きめくつて、誰れもかれも不思議にしいんとして了ふ。

僕は犬が好きだ。僕の内にも小犬が居る、寒りで仕樣がないから日向の椽に上げてやるといつの間にか僕の膝に上つて僕が原稿を書く邪魔をする、僕はそれが堪らなく可愛いゝ。僕は犬が好きだ、ジョンも好きだつた、ジョンが僕の内の犬だつたら矢張り僕の膝に上つて僕の邪魔をするだらう、そうして僕は堪らなく可愛くなるだらう。僕の内のラヴはかねてからの病身で僕に心配さして居るけれども矢張り活きて居る。此處の内のジョンは元氣のいゝ犬だつたのに僅か一日か二日の病氣で死んで了つたのだ……。

こゝ迄讀んで來た竹紫は一足前によろめいた、颯と吹いた風は吊文を奪つて白紙が空林を飜乎と飛んで行く、伊勢田が追かけて走る、ダッグが又續いて走つた。

原稿を受取つた竹紫はすうと水鼻をすゝつて再び讀み續け、最後に稍ゝ聲を張つて

ジョンは死んだ、其内には土となるだらう、土饅頭には草が生えるだらう、其草には小さい花が咲くであらう。其小さい花が即ちジョン——だ來年の春！來々年の春——噫長への春も秋も!!!

如是畜生發菩提心南無阿彌陀佛〳〵
武藏野の落葉に埋み土となれ……
『喝。』
と最終の一聲に一同は眼を見合せた、先刻から覗ひ寄つたダツグは御供の牛肉を喰へて走り出した。長い間の沈默は此時破れて一同はばら〳〵に座敷へと動いて行く。
木枯は愈〻吹募つて夕暮の日が寂しく土饅頭を照らした。……明治××年早大庭球部合宿ロマンスの一節である……。

《終》

大正十一年十一月七日印刷
大正十一年十一月十日發行
この一彈　定價金壹圓
不許複版
著作者　水谷武
發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　小川菊松
印刷者　東京市京橋區弓町二十五番地　高橋郁
發行所　東京市神田區錦町一丁目　誠文堂
電話神田二六一〇番　振替口座東京六二九四番
東京市京橋區弓町　三協印刷株式會社印刷

517
39

終